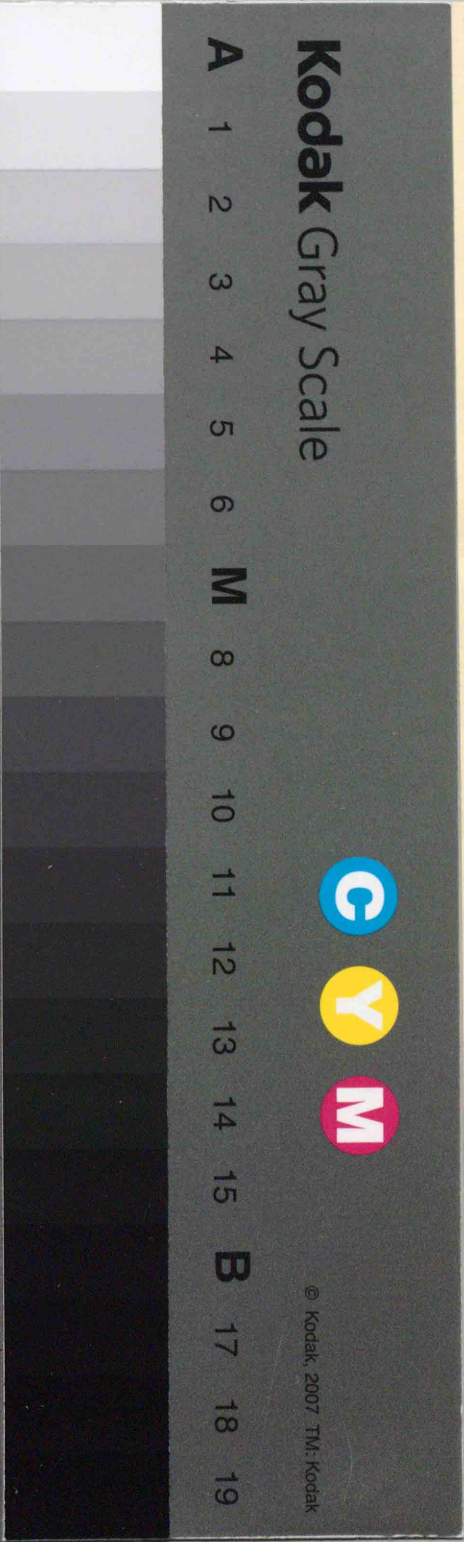
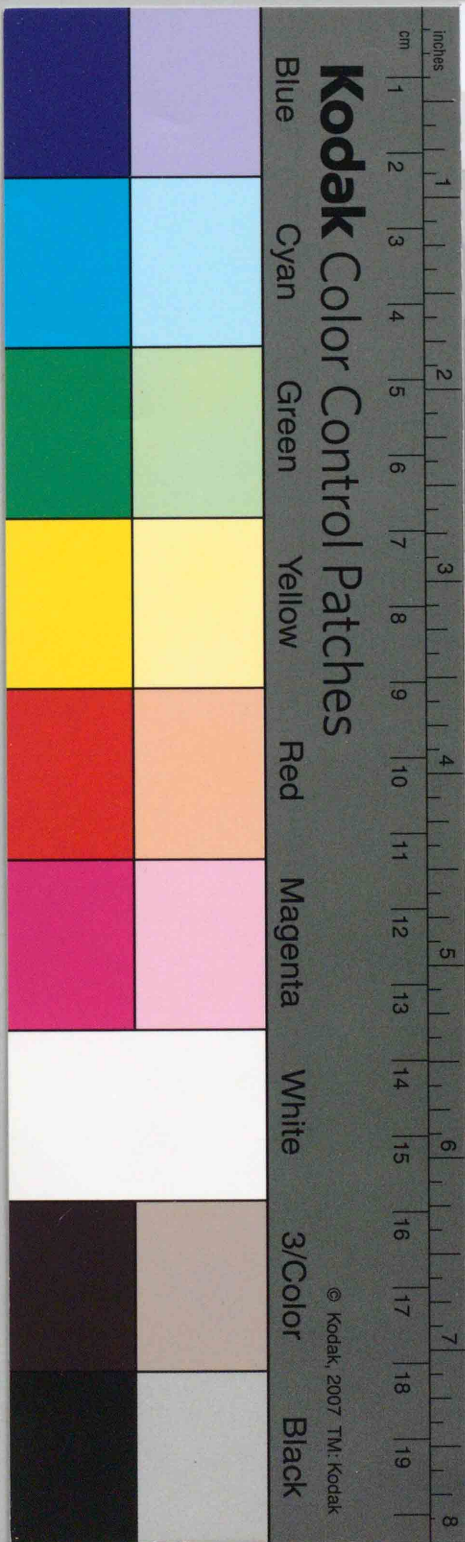


訂修新撰國語讀本  
佐々政一編  
卷六

359  
Sa19  
資料室



41504

教科書文庫

4
810
41-1918
200030
1535

77



資料室

2759  
8219

日六十月一年七正大

濟定檢省部文

用科語國校學中

文學博士佐々政一編

訂修



新撰國語讀本

株式會社明治書院



訂修新撰國語讀本卷六目次

一	美術の保護上	一
二	美術の保護下	六
三	エトランゼ	一〇
四	秋の歌	一六
五	秋の夜	一九
六	倫敦の霧	二一
七	伊太利の海岸	二八
八	伊藤公を誅ぶ	三三

目次

九	知己難	三	八
一〇	白河殿の夜討	四	三
一一	白峯の陵	五	二
一二	わが家の富	五	六
一三	寺門政次郎に答ふ	五	九
一四	修辭上の轉義	六	七
一五	今様と朗詠	七	七
一六	俚諺論	七	九
一七	「ヴェニス」の商人「法廷」の場 上	八	五
一八	「ヴェニス」の商人「法廷」の場 中	九	〇
一九	「ヴェニス」の商人「法廷」の場 下	九	六

二〇	芭蕉と蕪村の句	一〇	一
二一	風雅論	一〇	三
二二	能損の道	一〇	九
二三	櫻 諍	一一	三
二四	如意輪堂	一一	六
二五	日蓮上人	一一	二
二六	戦争の結果	一一	六

修訂新撰國語讀本卷六目次終



修訂新撰國語讀本卷六

一 美術の保護 上

蒼蒼たるこの天、漠漠たるこの土、その閒、國をたつるもの  
いくばくぞ、東に睥睨するものあり、西に窺窺するものあり、  
南に、北に、前に、後に、互に備へ、互に窺ふ。既に國をこの閒にた  
つるもの、よろしく、その兵を強くし、その富をにぎはし、退き  
ては百萬の敵軍、海を蔽うて來るも守護するに足り、進みて  
は懸軍萬里、異疆絶域にのぞむも勝を制するに足ること

力めざるべからず。而してこれを内にしては、家毎に足り、人毎に給し、貿易製造の途、日に開け、月に進むことをはからざるべからず。されどよく斯くの如くなりたりとも、これ未だ以て國家の品位をたかむる所以にはあらず。果して然らば國家の品位をたかむる方策は如何。

それ、古より傳來せる巧工の製作にして、よく大に、よく雄に、よく高に、よく壯に、よく精に、よく麗に、以て一國國民の趣味を知るに足り、以て一國國民の采手を窺ふに足り、觀る者をして景仰・追慕の情に堪へざらしめ、聽く者をして敬肅・謹恪の心を生ぜしむるものは、即ち所謂美術品なり。故にかの建築、かの彫刻、かの繪畫、一面はこれが保存に力め、一面はこ

れが振興に盡さざるべからず。もし美術品の保存と振興とをして其の宜しきを得しめ、外國人をして益、敬仰する所あらしめば、その我が品位を高むること、そもいばかりぞや。誰か美術問題を目して閑人の閑問題となすものぞ。

わが帝國の美術たる、まことに我が帝國歴史の一要素を組成するものにして、その繪畫、その彫刻、その建築、たとひ幾分を支那・天竺・三韓等の風姿に學び、構造にならひたる跡ありとするも、その我に入ることの久しき、遂にこの風土、この民心と同化し、形を變じ、勢を變じ、その精神は、論ずるまでもなく、全く我が帝國の國情と民心とに合一し、その美術品は眞に國民の趣味・采手をあらはす唯一の要具とはなれり。

顧ふに、藤原・源平の時代、北條・足利の時代、豊臣・徳川の時代、皆とりどりに名工・妙手を出せり。その殺伐の時代において、は、堅牢無雙の城郭の如き建築的美術興り、兜の如き、鎧の如き、鐔の如き、目貫の如き、精緻・巧妙の彫刻的美術起れり。その佛教隆盛の時代において、大伽藍・大堂塔の如き建築的美術興り、阿彌陀佛・毘盧遮那佛の如き、最妙最巧の繪畫的美術起れり。かくてその建築・彫刻・繪畫などを見るに、一方は亂世の相をあらはし、一方は昌平の相をあらはせり。此等は以て當時の世態・人情を詳かにするを得るのみならず、かの狷介不羈なる美術家が、眼一世に超絶し、時と合はず、人と合はず、慨然流俗中に奮ひて巧品を製出したるも知らるべく、かの

(一) Michelangelo. (1475-1564)  
(二) Raffaello. (1483-1520)

豪邁・逸宕なる美術家が、精神飄乎として天外に翻揚し、ここに大美術品を製出したるも知らるべく、かの無我・無慾なる美術家が、山に、水に、月に、花に、木に、竹に、草に、人に、獸に、鳥に、蟲に、雨に、風に、如何に忠實に、その自然を描出したるかも知らるべきにあらずや。誰かいふ、我等にミケランジェロなしと、またラファエロなしと、こは皆精査・檢覈せざる者の言のみ。前代に於ける我が美術は正にかくの如きものあり。而して維新の初、社會風潮の一變するや、破壊の氣風四方に起り、人人徒に小利・小智に流れ、美術の如きは贅澤なりと唱ふるに至りぬ。偶、有識の士ありて、その不可なるを説けど、なほ未だ勢力なく、美術の前途轉・憂ふるに堪へざるものあり。

## 二 美術の保護 下

顧みれば、古昔王朝の盛なる寧樂・平安の都は、まことに我が美術の淵叢なりき。その堂塔・伽藍は高く半空に聳えて、雲相迷ひ、木魚鐘聲相應へて、竹林、鳥おのづから閑に、その建築は雄麗・宏壯、古今に絶して、鬼泣き神哭し、その藏むる所、木像・金像・銅像の如き古佛像より、千種・萬種の繪畫ここに集まり人をして天上常に一種異采の雲氣あるを疑はしめけり。其の他鎌倉の如き、平泉の如き、固より寧樂・平安と同日の談にあらざるも、猶美術界の一方に雄視して、長く後世を照せり。さるに今は即ち如何。荒煙寒草、滿目蕭條として、寺門破れ、屋



法隆寺金堂と五重塔

瓦落ち、彫刻・繪畫等の絶世の美術は、雨露の漏るも、蟲鼠の害するも、之を憂ふる者鮮なきにあらずや。大寺巨刹すら斯くの如し。一箇人の所藏の如きに至りては保存の完全ならざる知るべきのみ。その甚しきに至りては、寺院の維持に窮して、千古絶調の寶物を外人の手に賣卻せしものも

ありといふ。まして一箇人の所藏の如き、惜しげもなく海外に流出せしめたるもの、それいくばくぞや。今にして早くこれが計をなさずば、前途の事知るべきのみ。

つらつら現今の美術界を觀察するに、果してこれを振ふに足る人士あるか。余は實にこれを知らざるを愧づるなり。蓋し大美術家は、百歳・二百歳にして、僅かに一二人出づるものにして、固より代代に求むべきものにあらざれども、その後塵をだに望むあたはざるに至りては、また遺憾の限にあらずや。今これが原因を尋ぬれば、美術家の阿堵物に戀戀たるもその一ならむ、小成に安んずるもその一ならむ。その他風潮の然らしむる所もあらむ、需用僅少の致す所もあらむ。

されどその最も大なるは振興その法を得ざるにあらむ。

ああ、美術品の製作はわが國民特有の長技なり、獨得の長所なり。山の光、水の影、氣候の溫和、風雨の靜穩、固よりこれが冥助をなすならむも、又先天の性質、既に然るにあらざるなきを得むや。苟も振興そのよろしきを得ば、以てわが國民の品格を高むること期して待つべきなり。

抑、わが美術品たる、獨り古代に關する歴史の一要素たるのみならず、まことに國家と生命を共にするもの、その衰と盛とは、暗暗裏に國家品格の高低如何に關すとせば、これが振興の途、また實に國家全體の力を以てこれに當らざるべからず。余の考ふるところによれば、まづ一大國立博物館を



建て、一方には、寺社・祠宇は更なり、一箇人所藏の古美術品までも悉くここに集め、以て篤志家の參觀を許し、一方には今人の製作にかかる美術品を掲げ、以て來者を勵ますにあり。若しそれ斯くの如くならば、一は歴史の參照となり、二は古物の散逸を防ぎ、三は後進美術家の典型となり、四は全國民をして美術の重んずべきを知らしめ、併せて高尚・靜平の心を養はしむるに至らむ。果して事ここに出でむか、豈に希臘羅馬の古美術をして美を前に專にせしめむや、豈に凱旋門・頌徳表をして壯を後に擅にせしめむや。(三宅雪嶺)

三 エトランゼエ

\* Etranger.

「エトランゼエ」即ち外國人といふ言葉は、遠く東洋から旅して來たものの胷に、一種の言ひあらはし難い響をもつて追つて來ます。東京で銀座通などを歩いて居る西洋人を見かけると、「あ、異人が通るな」と、よく自分でも言ひましたものです。さういつた自分が當地へ來て見ると、恰度反對の位置に立つことを感じます。今は私の方が異人です。

「彼處に立つて居るのは支那人かねえ。」

「なあに、あれや日本人だ。」

船著場などで、何處の旅稼ぎの夫婦者かと思はれるやうな西洋人から、かういふ頗る侮蔑の調子を帯びた言葉が、しかも言葉が通じないと思つて、自分の鼻の先で交換される

(←) Gaul.

のを聞いた時は、胃が悪くなりました。

私は日本を出る時に、ある友人から、佛蘭西の人はゴール人といつた昔の時代から、外國のものを優遇して、種々な土地の話を書くことを好んだ人種だと聞いて來ました。船に乗つて見、港に著いて見、この都會に來て見ると、成る程、あの友達の言つたやうに、佛蘭西人は外國のものに對して寛大で、そしてホスピタブルだと感じます。しかし、どれだけ日本がこの國の人達に知られ、どれだけ日本人の性質が理解されて居るかといふことを考へると、實に心細い。

「日露戦争以後、日本の位置が非常に高まつた」といふことは、外國に住む同胞からよく聞かされる言葉です。これとい

(⇒) Hospitable.

ふのも、皆、戦争の御蔭だ。それもよく聞かされる言葉です。けれども、戦争以外に、何一つ日本人の誇るべきものが有るか、何一つ好いものがあるか。かういふ言葉が同胞の口から出るのを聞く度に、これほど自分で自分を卑しむ心を持つた人達が、我が同胞の中にも居るかと思つて腹立たしくなります。かういふ人達の眼には、明治以來の日本の青年が何程の努力をして來たか、といふことも能くは映らないし、又過去に於て、自分等の先祖がどういふ精神を持ち、どういふ教養を重ね、どういふ産物を遺して置いて呉れたか、といふことすら眞實には映つては居ないのだと思ひます。自分等の同胞の中にすら、平氣でかういふことが言はれたり、傳へら

(一) 島津久光使を奉じて生麥村に至る。從士英人の無禮を怒りて之を斬る。英人幕府に迫りて償金五十萬兩を出さしめ、文久三年七月更に軍艦を率ゐて鹿兒島に至れり。

れたりする。まして生麥事件あたりからの攘夷の記録を讀み、乃木大將の自殺を新聞の上で知り、日本人の芝居などを見て、腹切と日本人とを直に聯想するやうな一般の歐洲人には、どんなに自分等が映ずるか、思ひやられます。

私は異郷の客となつて見て、今更のやうに藝術の尊さをつくづくと感じました。そして異人種と異人種とが互に理解し、眞に互の美質を知合ふのに、藝術ほど近くて正直な道は無いといふことを、しみじみと感じました。もしも歐羅巴が、私達の先祖の曾に、恐ろしい幽靈のやうな「黒船」と直に聯想されたやうに、ただ物質的の威力を以て迫り來るもので、露西亞の文學も傳はらず、獨逸の音樂も傳はらず、佛蘭西の

(三) 葛飾氏、浮世繪師。(二四〇—二五九)  
(三) 北川氏、浮世繪師。(二四三—二四五)  
(四) 歌川氏、浮世繪師。(二四七—二五八)  
(五) Hern. 小泉八雲。(二五—二五六)  
(六) Loti. (1850-) 佛蘭西現代の作家。

繪畫も傳はらないとしたら、どんなものでせう。歐羅巴人といふものが、眞實に私達に解つたのは、彼等の藝術が知られてからでは無いでせうか。これは私達に對する歐羅巴人の上にも同様だと思ひます。假令極少數にもせよ、私達を解して呉れる外國人は、北齋や歌麿や廣重の繪畫により、ハーンやロチイの書いた日本の物語を通じて、いくらか私達のことを知つた人達です。

或露西亞人が、私の友人に、「露西亞といふものが歐羅巴に知られたのも、自分等の藝術が知られてから後の事だ」と話したさうです。日本が戦争ばかりで世界に紹介されて、それをまた唯一の誇とする様な同胞の多い間は、歐羅巴人の心

に映ずる私達の姿は、まだまだ幽霊の様なものです。生き、愛し、死ぬる私達の、血もあり、肉もある正體は、眞の親しみを以ては知られてゐないのです。私達はまだ歐羅巴人と眞實に心の顔を合せてはゐないのです。(島崎藤村—平和の巴里)

四 秋の歌

藤原敏行

秋來ぬと、目にはさやかに見えねども、

風の音にぞおどろかれぬる。

菅原道眞

この度はぬさもとりあへず、手向山、

(一五六)

(二五〇—二五九)

大和國添上郡奈良山。

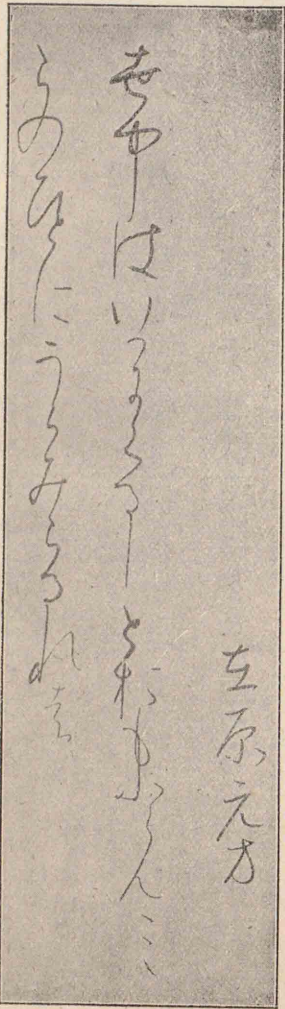
(四)古今集撰者の一人。(二五二—二五八) び

紅葉のにしき神のまにまに。

紀貫之

川風の涼しくもあるか、うち寄する

浪とともにや秋は立つらむ。



紀貫之筆蹟

年毎に紅葉ば流す龍田川、

みなとや秋のとまりなるらむ。

(五)大和國生駒川の下流、南流して大和川となる。

古今集撰者の一人。(三九一) 五

古今集撰者の一人。(三八一) 五

古今集時代の人。

凡河内躬恆

かくばかり惜しと思ふ夜を、徒に  
寝てあかすらむ人さへぞ憂き。

壬生忠岑

久方の月の桂も、秋はなほ

紅葉すればや照りまさるらむ。

大江千里

月見れば千ぢにもこの悲しけれ、

わが身ひとつの秋にはあらねど。

讀人しらず

昨日こそ早苗とりしか、いつのまに

稲葉そよぎて、秋風の吹く。

白雲に羽根うちかはしとぶ雁の

數さへ見ゆる秋の夜の月。

奥山に紅葉ふみわけなく鹿の

聲きくときぞ秋はかなしき。

ひぐらしの鳴く山里の夕暮は、

風より外に訪ふ人もなし。

五 秋の夜

月の夜は秋こそ勝れたれ。春の月の光は美しき女の童の  
髪のごとし。めでたきことは誠にめでたし、なつかしきこと

も誠になつかし。されど尙聊か物足らぬ心地す。冬の月は水晶もて作れるものを見るが如し。清さは餘りありて、味無きに近し。夏の夜の月の團圓と大いなるが、海原の果より、松の樹の閒より、又は市中の薨の浪閒より出でたる目ざましく、心ゆくものにて、夜の景色も快くをかしけれど、唯我が魂の世に浮かるるをこそ覺ゆれ、天地の靈氣の身に浸みいるやうなるを覺ゆることなし。

秋は夜おもしろく、夜は月おもしろし。中の秋の五日・六日の月の、ふと見る夕暮の空に已に出でゐて、雑木の梢もろこしの垂葉などに風かすけく囁く、まづおもしろし。遠山黒く暮れて、素月輝を揚げ、庭樹のそれぞれ、闊葉纖葉の葉表の照

葉蔭の闇、おのがじし畫趣を爲し、詩情を作りて、合して、爽涼・清澄の景を醸し出すさま、いづくにも有りふれたることながら好し。夜更け、蟲吟じて、世の中靜かなる時、たまたま燈前に書をさし措きて、起つて廊を歩む因みに、ほの白き窗櫺を看て、戸をおし開きて出づれば、月、天心を過ぎて光華六合に瀰り、霜に澄める夜の氣は水まさに凍らむと欲するが如くなる、身心頓にこの世のものならずなりたるやうに覺えて、秋ならでは、月ならではと思はる。(幸田露伴 東亞の光)

## 六 倫敦の霧

昨夜は夜一夜、枕の下で、ばちばち云ふ響を聞いた。これは

(→) Blind.

近處に大停車場のある御蔭である。この停車場には、一日のうち汽車が千幾つか集まつて来る、それを細かに割付けて見ると、一分に一列車位づつ出入をする譯になる。其の各列車が、霧の深い時には、停車場間際へ來ると、何かの仕掛で、爆竹の様な音を立てて相圖をする。信號の燈光は青でも赤でも、全く役に立たない程暗くなるからである。

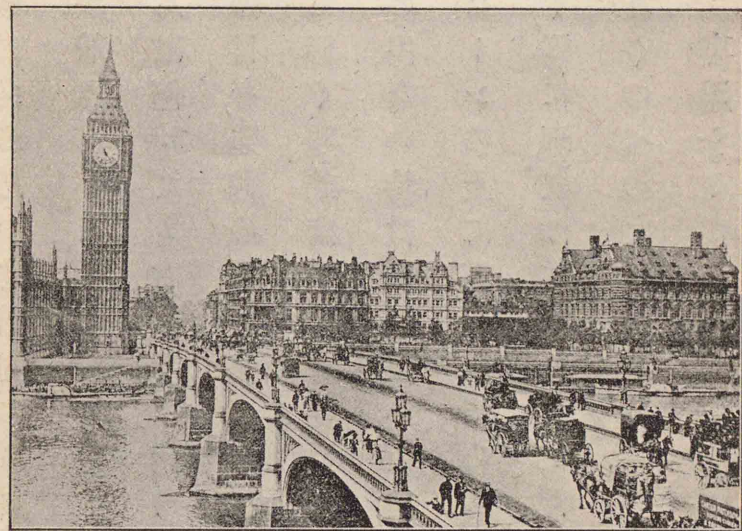
寢臺を這下りて、北窗の(シヤラブレ)日蔽を捲きあげて外面を見卸すと、外面は一面に茫としてゐる。下の庭は、芝生の底から、三方煉瓦の塀に圍はれた一間餘の高さに至る迄、何も見えない。ただ空しいものが一杯詰つてゐる。さうしてそれが寂として凍つてゐる。鄰の庭も其の通りである。此の庭には綺麗な

(二) Lawn.  
廣場。

(三)ローンがあつて春先の暖い時分になると、白い髻を生ましたお爺さんが日向ぼつこをしに出て來る。其の時、このお爺さんは何時でも右の手に鸚鵡を留らしてゐる。さうして自分の目を、鸚鵡の嘴で突つかれさうな位に近く、鳥の傍へ持つて行く。鸚鵡は羽搏きをして、しきりに鳴きたてる。お爺さんの出ない時は、娘が長い裾を引いて、斷え間なく芝刈器械をローンの上に轉がしてゐる。この記憶に富んだ庭も、今は全く霧に埋まつて、荒れはてた自分の下宿のそれと、何の境もなくのべつに續いてゐる。

裏通を隔てて向側に、高いゴシック式の教會の塔がある。其の塔の、灰色に空を刺す天邊で、何時でも鐘が鳴る、日曜は

殊に甚しい。今日は鋭く尖つた頂は無論のこと、切石を不揃



橋 - タ ス ン ミ ト ス エ ウ

に疊み上げた胴中さへ、所在が丸で分らない。それかと思ふ處が心持黒いやうであるが、鐘の音は丸で響かない。表へ出ると、二閒ばかり先は見える。その二閒を行盡すと、また二閒ばかり先が見えて来る。世の中が二閒四方に縮まつたかと思ふと、歩けば歩く程、新らしい二閒四方が

現れる。その代り、今通つて来た過去の世界は、通るに任せて消えて行く。

四つ角で馬車を待合せてみると、鼠色の空氣が切抜かれて、急に眼の前へ馬の首が出た。それなのに、馬車の屋根に居る人はまだ霧を出切らずにゐる。此方から霧を冒して飛乗つて下を見ると、馬の首はもう薄ぼんやりとしてゐる。馬車が行違ふ時は、行逢つた時だけ、綺麗だなと思ふ。閒もなく、色のあるものは濁つた空の中に消えて仕舞ふ。漠漠として無色の裏に包まれて行く。ウエストミンスター橋を通る時、白い物が一二度眼を掠めて翻つた。眸を凝して其の行方を視詰めてみると、封じ込められた大氣の裏に、鷗が夢の様に微



(一) Victoria.  
(二) Tait.  
(三) Battersea.

かに飛んでゐた。其の時、頭の上で、大時計が嚴かに十時を打ちだした。仰ぐと空の中であだ音だけがする。

ヴェクトリヤで用を足して、テート畫館の傍を河沿にバタシーまで來ると、今迄鼠色に見えた世界が、突然、四方からばつたり暮れた。泥炭を溶いて、濃く身の周圍に流した様に、黒い色に染まつた重い霧が、目と口と鼻とに逼つて來た。外套は抑へられたかと思ふ程濕つてゐる。薄い葛湯を呼吸するばかりに氣息が詰る。足許は無論、穴藏の底を踏むと同然である。

自分は、此の重苦しい茶褐色の中に、しばらく茫然と佇立んだ。自分の傍を、人が大勢通る様な心持がするけれども、肩

が觸れあはない限は、果して人が通つてゐるのか何うだか疑はしい。其の時、この濛濛たる大海の一點が、豆位の大きさに、どんよりと黄色く流れた。自分はそれを目標に四歩ばかりを動いた。すると或店先の窗硝子の前へ顔が出た。店の中では瓦斯を點けてゐる。中は比較的明かである。人は常の如く振舞つて居る。自分はやつと安心した。

バタシーを通り過ぎて、手探りをしないばかりに向ふの岡へ足を向けたが、岡の上には、同じ様な横町が幾筋も竝んでゐて、青空の下でも紛れ易い。自分は、向つて左の二つ目を曲つた様な氣がした。それから二町程眞直に歩いた様な心持がした。それから先は丸で分らなくなつた。暗い中にたつ

た一人立つて首を傾けた。右の方から靴の音が近寄つて來たと思ふと、それが四五間手前迄來て止つた。夫から段段遠退いて行く。仕舞には全く聞えなくなつた。あとは寂としてゐる。自分は又暗い中にたつた一人立つて考へた。どうしたら下宿へ歸れるか知らん。(夏目漱石—永日小品)

### 七 伊太利の海岸

僧堂を辭し去る朝、大空は灰色の紗を被せたる如くなりき。岸には腕たしかなる漕手幾人が待ちうけ居て、我が一行を舟に上らしめたり。纜を解きてカブリ(カ)に向ふ程に、天を覆ひたりし紗は、次第に斷れて輕雲となり、大氣は見渡すかぎ

(一) Capri.  
ナポリ灣外の  
小島。

(二) Sicilia.

(三) Jar.  
木、石炭等を  
蒸餾して得た  
る黒色の濃粘  
液。

り澄透りて、水面には一波の起るをだに認めず。

舟のゆくては杳茫たる蒼海にして、その抵る所はシチリアの島なり、いな、亞弗利加の北岸なり。ゆんでの方は巖石屹立したる伊太利の西岸にして、所所に大いなる洞穴あり。洞前に小村落あり。その幾箇の人家、わざと洞中より這ひいでて、背を日に曝すもののごとく、洞の直に水に臨めるもの。前には、漁人の火を焚きて食を調へ、又は小舟に(カ)タールを塗れるあり。

舷下の水は碧くして濃かなり。試に手をもて探れば、手もまた水と共に碧し。舟の影の水に落ちたるは、極めて濃き青色にして、櫓の影は濃淡の紋理ある青蛇を畫けり。われは聲

(→) Minerva.

を放ちて叫びぬ。げに美しきは海なるかな。若し彼の蒼の大  
 いなるを除かば、何物かよくこれと美をくらぶべき。我は幼  
 かりし時、地に仰臥して天を觀たるを思ひ出でぬ。今見る所  
 の海は即ち當時見し所の天にして、譬へば夢の一變して現  
 となれるが如し。

舟は巖より成れる三小嶼の傍を過ぎぬ。その小嶼のさま、  
 海底より石塔を築き上げて、その上に更に石塔を儘し掛け  
 たる如し。青き波は縁なる石を洗へり。想ふに風雨一たび到  
 らば、このあたりは羣狗吠ゆてふ鳴門の怪の栖處すまひなるべし。  
 不毛にして石多きミチルワの岬は、眠るが如き潮これを  
 繞れり。いにしへ妙音の女怪の住めりきといふはここなり。

(→) Tiberius.  
 (B.C.45—A.D.37)

而してカプリの風流天地はこれと相對せり。いにしへチベ  
 リウス帝が奢を極め、情を縦にし、灣頭より眸を放ちてナポ  
 リの岸を望みきといふはここなり。

舟人は帆を揚げたり。我等は風と波とに送られて、やうや  
 くカプリの島邊に近づきぬ。水のまことの清らかさ、まこと  
 のあきらかさを知らむと欲せば、この海を見ざるべからず。  
 舷に倚りて水中を見れば、一塊の石、一叢の藻、歴歴として數  
 ふべく、晴れたる日の空氣といへども、恐らくはこの玲瓏透  
 徹なからむとぞ思はるる。

カプリの島は唯一面の近づくべきあるのみ。その他は皆  
 削り成せる斷崖にして、その地勢ナポリに向ひて級を下る

が如く、葡萄と橘・柚・橄欖の林とは、交る交るこれを覆へり。岸に沿へる處には、數軒の海人の家と一棟の番小屋とを見る。稍、高き林木の間に、屋瓦の羣を成せる小都會あり。一橋・一門ありてこれに通ず。一行は棕櫚の木立てる酒店の前に歩を留めつ。われはこの島を一週し、南に突きいでたる大石門をも見ばやとて、漕手二人を呼び、岸なる舟に乗りうつりぬ。風少し起りたれば、行程の半ばかり帆の力に頼ることを得たり。巖壁に近き處には、漁人の網を張りたるあれば、舟はこれを避けて沖の方へ進みぬ。既にして奇景の人目を驚かすに足るものあるを見る。灰色なる巨石の直立すること千丈なるあり。その頂は天を摩し、所所纔かに一石塊を容る

べき罅隙を存して、蘆薈などこれに生じたり。青き焰の如き波に洗はれたる低き巖根には、紅の海百合いと繁く著きたるが、その紅の色は水を波りて愈、紅に、巖石の波に觸れて血を流せるかと疑はる。

既にして、我等は海を右にして島を左にする處に至りぬ。水を吞吐する大小の窟許多ありて、中には波の返す毎に、僅かにその天井を露すあり。こはかの妙音の女怪の栖處にして、草木繁茂せるカプリの島は、唯これを蓋へる屋根たるに過ぎざるにやあらむ。(森鷗外―即興詩人)

## 八 伊藤公を誅ぶ

明治四十二年十月二十六日、我が友樞密院議長伊藤博文  
公韓國兇徒の狙撃する所となり、暴かに清國吉林省哈爾賓



伊藤博文

驛に薨ず。嗚呼哀しい哉。予何ぞ  
多言するに忍びむ。然りと雖も、  
予君と交はる五十餘年、異體同  
心、生死苦樂を共にし、國歩艱難  
の秋に始まり、太平富貴の日に

# 春 秋 山 人

同筆蹟

至り、終始渝る事莫し。自ら  
謂ふ、交友の誼今古に愧づ  
る無し。と、予遂に復一言せ

ずして止む可からず。予君に長ずる事六年、君、予の垂死を哭

する事二回、予幸に君の看護に因つて再生するを得たり。料  
らざりき、今日反つて君の葬を送らむとは。嗚呼哀しい哉。

回憶すれば四十七年前、文久癸亥の仲夏、君、予と偕に發憤  
して海軍の術を學ばむと欲し、禁を犯し、潜かに泰西に航し、  
居ること纔かに半年餘、馬關、鹿兒島の攘夷を聞き、意を決し  
て急に還り、首として開國を倡へ、故國を危難より脱せしむ。

高杉晉作

高杉

木戸孝允

木戸

大久保利通

戸、大久保二公を佐けて尤も力あり。維新の績これよりして  
破竹の如し。進取の宏謨を翼贊し、維新の大業を成就す。救を

奉じて憲法を創定し、長く國家の本を固くし、その他法律・制度の設、槩ね君に俟たざる莫く、洵に組織の才を推す。四度總理大臣となりて勳業の盛を極め、首めに韓國統監となりて保護の範を立つ。

君、學漢洋を該ね、識東西に通ず。尤も東洋の平和を以て念と爲し、常に忠節道義を以て淬礪し、王臣匪躬を以て自ら任ず。故に國民は仰いで文治の宗と爲し、外人は視て平和の表と爲す。留韓四年、歸來未だ曾て寧處せず。年七十に垂むとして、一歳の行萬哩を期し、節冬寒に向ひ、北滿の野に見學す。盡忠報國の至情に出づるに非ずんば、孰か能くかくの如くならむ。豈に謂はむや、君の忠節にして茲の不測に遭ひ、暴かに

異邦の地に薨ぜむとは、嗚呼哀しい哉。

君の訃電聞す。皇上震悼、敕して國葬を行はしめ、白叟、黃童、織婦、耕夫も哀悼せざる莫く、乃ち外國帝王、大統領、大臣紳士に至るまで親しく弔電を發し、我が不幸を言はざる莫く、内外新聞争うて君の才德、勳業を稱贊す。輿望の盛、振古いまだ君に比すべきものあらざるなり。抑、予はまたこれに因りて我が國民に望むことあり。誠に君の死を哀しまば、即ち宜しく舉國一致、盡忠報國、東洋の平和を維持するに務め、以て君の志を紹ぐべし。古人云ふ、匪以報公、維以報國、死者復生、信我此言。庶はくは君をして瞑せしむるを得む。嗚呼哀しい哉。

(井上馨)

九 知己難

朋友にして知己ならざるものあり、知己にして朋友ならざるものあり。否、知己は敵人にもこれあるべきなり。かの仲達(三)が祁山(三)渭水(三)の空營を按じて、天下の奇才なり」と叫びたるを見れば、かの孔明(四)のためにはよき知己なりしにあらずや。孔明は實に二箇の知己をもてり、敵にては仲達、身方にては玄徳(五)。

人は何人とも朋友となるを得べし。情と情と相接する日は即ち朋友の出で来る時なり。觸るれば情を生じ、著すれば情を生じ、久しければ情を生じ、屢すれば情を生ず。竹馬の友

(一)魏の名將司馬懿

(二)八一九

(三)支那甘肅省鞏昌府

(四)蜀の丞相諸葛亮

(五)八四一八九

(六)蜀の昭烈帝劉備

(七)八三〇一八六三

同窓の友、同郷の友、同業の友、同位置の友、同臭味の友、友もまた類多し。然り、天下何人か友ならざるものあらむ。少し心をとめて談話すれば、東京より横濱に至るまでの汽車中にてすら、幾多の友人は得らるるにあらずや。

知己に至りては然らず。天下千百の朋友を得るは易けれども、一人の知己を得るは難し。知己とは何ぞ。我よりすれば彼に知らるるなり。彼よりすれば、我知るなり。君(六)ならでたれにか見せむ梅のはな、色をも香をも知るひとぞ知る。これ實に知己に對する情なり。知己實に難し。故に一の知己を得れば、殆ど一の生命を得たるよりも嬉しく、一の知己を失へば、一の生命を失ひしよりも悲し。鍾子期死して、伯牙絃を絶ち、

(八)古今集、紀友則の歌

(九)支那戰國時代の初の人

支那戰國時代末期の人。

中唐の詩人。

荆軻死して、高漸離また筑を撃たず。その心まことに憐むべきものあり。

楊巨源の詩にいはく、詩家清景在、新春柳嫩鶯黃色未勻。若待上林花似錦、出門皆是看花人。と。龍を見て、龍となす、難きにあらず。一寸の蛇を見て、はやくも、その雲を起し、霧を吐き、茫洋として玄閒を窺め、日月に薄るを知る、これ難きなり。知己のかたきは、その未だ發達せざる時において、他日の發達を卜することの難きにあり。その見たる嘻笑怒罵の外に、隠れたる宵閒の神祕を會得することの難きにあり。

人はその半身以上は祕密なり。知己はよく鍵なくして此の祕密を知る。もとより、他の我に向ひて語るを待たざるな

蘇轍、子由はその字。(六一九—七三)

(五) 前漢の賈誼。(四六—一四三)  
(六) 戰國時代の楚の人。名は平。文章家。(一五二)

り。語るを待ちて之を知るが如き、これ豈に知己ならむや。而して知己の感は又兄弟の間にもあり。東坡曾て獄に投ぜられて、重辟に處せられむとするを聞き、その弟子由に書を贈りていはく、是處青山可埋骨、他年夜雨獨傷神。與君世世爲兄弟、又結來生未了因。と。その同胞の情元より篤し。況や、これに重ぬるに、雙雙知己の恩愛を以てするに於てをや。死後なほ兄弟となり、その未了因を繋がむといふ。世の兄弟にして斯くの如き知己の感あるもの、古往今來、それいくばくぞ。

知己は敵人にあるのみならず、生面の人にもあり、或は古人に對してもあり。知己の交感は時を問はず、處を論ぜず。賈生が屈原を慕ひ、孟軻が孔子を慕ひ、しかして孔子が周公を



(一) Ciro. (B.C.106-43)

(二) Scipio. (B.C.185?-129)

ローマの名將。

(三) 唐の人。太宗の朝に侍中たり。(一四〇一三三)

慕ひて、「吾また夢に周公を見ず」といひしが如き、その言の濃  
到・深切、感ずべきにあらずや。キケロ曰く、「余に對しては、スキ  
ピオなほ生けるなり。しかして以て常に生くべし」と。嗚呼、宇  
宙茫茫、ただ知己ありて以て繋ぐところあり。知己なくば人  
生は荒野のみ、荆棘のみ。

人は知己のためにその憂苦患難をともにするを厭はず。  
甚しきは其の一身を投じて知己のために犠牲となるもの  
あり。かれ等は漫に犠牲となるにあらず、實に知己のために  
犠牲となるなり。苟も一の知己を得る、生命を捨つるも悔い  
ず。況や區區たる浮世の名利をや。魏徵が、「人生感意氣、功名誰  
復論」といふ句は、實に人の深奥なる思想を吐露したるもの  
なり。

人生の最も清福なるは知己を持てるにあり。朋友中、知己  
を持てるは最も清福なり。しかしてその兄弟姉妹、父母の中  
に知己を持てるは、最も大いなる清福なり。かの東坡、子由の  
如く、風雨の夜、兄弟牀を並べて千古の懷を敘するを得ば、天  
下又これに優る清福なからむ。(徳富蘇峯)

### 一〇 白河殿の夜討

白河殿にはかくともしろしめさざりしかば、左大臣殿、武  
者所の親久を召されて、「内裏の様見て參れ」と仰せければ、親  
久即ち馳せかへり、「官軍既に寄せ候」と申しも果てぬに、先陣

(四) 崇徳上皇の御所。時は保元元年(一〇六)七月。  
(五) 藤原頼長。  
(六) 後白河天皇の御所を指す、高松殿なり。

既に馳來る。その時鎮西八郎申しけるは、爲朝が千度申しつ  
るはここ候、ここ候と忿りけれども力及ばず。爲朝を勇ませ  
む爲にや、俄かに除目行はれて、藏人たるべき由仰せけり。八  
郎、これは何といふ事ぞ。敵既に寄せ來るに、方方の手分をこ  
そせられむずれ、只今の除目物騒なり。人人は何にもなり給  
へ、爲朝は今日、藏人と呼ばれても何かせむ、只もとの鎮西八  
郎にては候はむとぞ申しける。

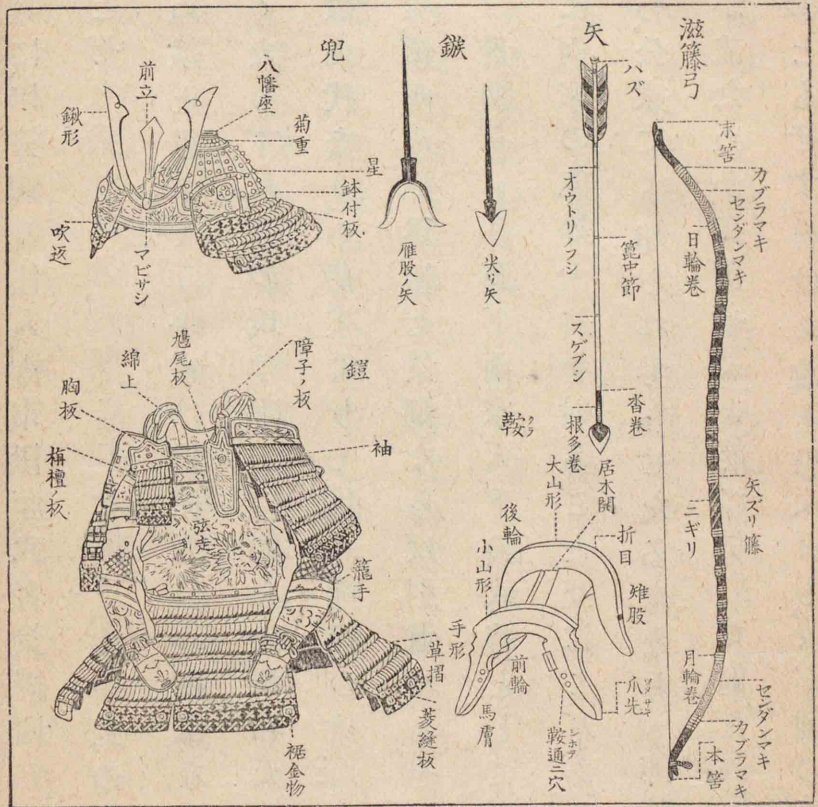
加茂河原。

さる程に安藝守清盛は三條へうち下り、河原を馳渡し、隄  
を上りに北へ歩ませて、二條河原の東隄にぞ控へける。その  
勢の中より五十騎ばかり、先陣に進んで押寄せたり。ここを  
固め給ふは誰人ぞ、名のらせ給へ。かく申すは安藝守殿の郎

三  
檢非違使尉(判  
官)に任ぜられ  
六條堀川に住む。

等に、伊勢國の住人、古市伊藤武者景綱、同じき伊藤五・伊藤六。  
とぞ名乗りける。八郎これを聞き、汝が主の清盛をだに合は  
ぬ敵と思ふなり。平家は柏原天皇の御末なれども、時代久し  
く、なり下れり。源氏は、誰かは知らぬ、清和天皇より爲朝まで  
は九代なり。六孫王より七代、八幡殿の孫、六條判官爲義が八  
男、鎮西八郎爲朝ぞ。景綱ならば引退けとぞ宣ひける。

景綱、昔より源平兩家天下の武將として、違敕の輩を討つ  
に、兩家の郎等大將を射ること互にこれあり。同じ郎等なが  
ら、公家にも知られ参らせたる身なり。下郎等の射る矢、立つ  
か立たぬか、御覽ぜよと、能つ引いて射たれども、爲朝これを  
事ともせず、合はぬ敵と思へども、汝が詞の優しさに、矢一つ



賜はらむ、受け  
て見よ。且つは  
今生の面目、又  
は後生の思ひ  
出にもせよ。と  
て、三年竹の節  
近なるを少し  
押磨いて、山鳥  
の尾を以て矧  
ぎたるに、七寸  
五分の丸根の、

鏡中過ぎて鏡代のあるを打食はせ、暫く保ちてひやうと射  
る。眞先に進んだる伊藤六が胷板かけず射通し、餘る矢が伊  
藤五の射向けの袖に裏かいてぞ立つたりける。六郎は矢場  
に落ちて死にたりけり。

伊藤五この矢を折りかけて、大將軍の前に参つて、「八郎御  
曹司の矢御覽候へ、凡夫の所爲とも覺え候はず。六郎既に死  
に候ひぬ」と申せば、安藝守を始めてこの矢を見る兵ども、皆  
舌を振つてぞ恐れける。景綱申しけるは、「かの先祖八幡殿、後  
三年の合戦の時、出羽國金澤の城にて、武則が申しけるは、「君  
の御矢に中る者、鎧兜を射通されずといふ事なし。抑、君の御  
弓勢を慥かに拜み奉らばや」と望みければ、義家、革よき鎧三

\*清原武則。

領重ね木の枝に懸けて、六重を射通し給ひければ、鬼神の變化とぞ恐れける。これより彌兵ども歸服しけりと申し傳へて聞くばかりなり。眼前にかかる弓勢も侍るにや、あな怖ろし。とぞおぢあへる。

かく口口にいはれて、大將宣ひけるは、必ず清盛がこの門を承つて向ひたるにもあらず、何となく押寄せたるにてこそあれ。何方へも寄せよかし。さらば東の門か。とあれば、兵皆、それもこの門近く候へば、もし同じ人や固めて候らむ。ただ北の門へ向はせたまへ。といへば、さも言はれたり。今は程なく夜も明けなむ。然れば小勢に大勢駈立てられむも見苦しかりなむ。とて引退く所に、嫡子中務少輔重盛、生年十九歳、

赤地の錦の直垂に、澤潟威の鎧に、白星の兜を著、二十四差したる中黒の矢負ひ、二所籐の弓持つて、黄河原毛なる馬に乗り、進み出でて、救命を蒙りてまかり向ひたる者が、敵陣こはしとて引返す様やあるべき。續けや若者。とて駈出でられけるを、清盛これを見て、有るべうもなし。あれ制せよ、者ども。爲朝が弓勢は目に見えたる事ぞかし。あやまちすな。と宣ひければ、兵ども前に馳せふさがりければ、力なく、京極を上りに春日表の門へぞ寄せられける。

爰に安藝守の郎等に、伊賀國の住人山田小三郎伊行といふは又なき剛の者、かたかは破りの野猪武者なるが、大將軍の引き給ふを見て、さればとて、矢一筋に恐れて、向ひたる陣

を引くことやある。たとひ筑紫八郎殿の矢なりとも、伊行が  
 鎧はよも通らじ。五代傳へて軍に遭ふこと十五箇度、我が手  
 に取つても度々多くの矢どもを受けしかど、未だ裏をばか  
 かぬものを、人人見給へ。八郎殿の矢一つ受けて物語にせむ  
 とて駈けいづれば、をこの功名はせぬに如かず、無益なり。と  
 同僚ども制すれども、元よりいひつる言葉を返さぬ男にて、  
 「夜明けて後に、傍輩の『いで矢目見む』といはむには、何とかそ  
 の時答ふべき。然れば日頃の功名も失せなむ事の無念なれ  
 ば、よしよし、人は續かずとも、おのれ證人に立つべし。』とて、下  
 人一人相具して、黒革威の鎧に、同じ毛の五枚兜を猪頸に著、  
 十八差したる染羽の矢負ひ、塗籠籐の弓持ち、鹿毛なる馬に

\*  
 平正盛

黒鞍置きて乗つたりけり。門前に馬をかけすゑ、物そのもの  
 にはあらねども、安藝守の郎等、伊賀國の住人、山田小三郎伊  
 行、生年二十八、堀河院の御宇、嘉承三年正月二十六日、對馬守  
 義親追討の時、故備前守殿の眞先かけて、公家にも知られ奉  
 りし山田庄司行末が孫なり。山賊強盜を搦め捕る事は數を  
 知らず、合戦の場にも度々に及びて高名仕りたる者ぞかし。  
 承り及ぶ八郎御曹司を一目見奉らばや。と申しければ、爲朝  
 「一定きやつは引儲けてぞいふらむ。一の矢をば射させむず、  
 二の矢を番はむ所を射おとさむず。同じくば、矢のたまらむ  
 所を、我が弓勢を敵に見せむ。と宣ひて、白蘆毛なる馬に金覆  
 輪の鞍置きて乗りたりけるが、かけ出でて、鎮西八郎これに

あり」と名乗り給ふ所を、本よりひき儲けたる箭なれば、弦音高く切つて發つ。御曹司の弓手の草摺を縫様にぞ射切つたる。一の矢を射損じて二の矢を番ふ所を、爲朝よつびいてひやうと射る。山田小三郎が鞍の前輪より鎧の草摺を尻輪懸けて、矢先三寸餘りぞ射通したる、暫しは矢にかせられてたまる様にぞ見えし、即ち弓手の方へ眞逆様に落つれば、矢尻は鞍に留まりて、馬は河原へ馳行けば、下人つと馳寄り、主を肩に引掛けて身方の陣へぞ歸りける。寄手の兵これを見て、彌、この門へ向ふ者こそなかりけれ。(保元物語)

一一 白峯の陵

(一) 近江國滋賀郡にありき。  
(二) 尾張國愛知郡、今は全く陸地となる。  
(三) 駿河國駿東郡愛鷹山の裾なる須戸沼附近の原野。

逢阪の關守に許されてより、秋來し山のもみぢ葉見すごし難く、濱千鳥のあと踏みつくる鳴海潟、富士の高根の煙浮島が原、清見が關、大磯、小磯の浦浦、むらさき匂ふ武藏野の原、鹽竈の和ぎたる朝げしき、象潟の蟹が苦屋、佐野の舟橋、木曾のかけ橋、心のとどまらぬ方ぞなきに、なほ西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、葎がちる難波を経て、須磨、明石の浦吹く風を身にしめつつも、行き行きて、讚岐の眞尾阪の林といふにしばらく筈をとどむ、草枕遙けき旅路のいたはりにもあらで、觀念修行の便りとせし庵なりけり。  
この里近き白峯といふ所にこそ新院の陵はあれと聞き、拜み奉らばやと、十月はじめつ方、かの山に登る。松柏は奥

(四) 駿河國庵原郡興津町の南方海岸。  
(五) 相模國中郡、當今小磯は大磯町に合併せらる。  
(六) 陸前國宮城郡にあり。  
(七) 羽後國田利郡象泊町附近の海岸なり。昔八十八湯九十九島ありて奇勝の名ありしが、文化元年鳥海山の噴火にて埋没す。  
(八) 上野國羣馬郡佐野村鳥川の渡。  
(九) 信濃國西筑摩郡木曾川の上流、土地幽邃山水の奇勝多し。  
一八二八。  
(一〇) 讚岐國綾歌郡松山村。  
(一一) 崇徳天皇。

深く茂り合ひて、青雲のたなびく日すら小雨そぼ降るが如し。兒が嶽といふけはしき嶺うしろに峙ちて、千仞の谷底より雲霧おひのぼれば、まのあたりもおぼつかなき心ちせらる。木立わづかにすきたる所に、土高く積みたるが上に、石を

古に如

み、新し、の山乃、以、如、是、清、涼、也、  
や、の、子、は、何、子、人、  
と、の、あ、ら、や、  
の、あ、ら、

蹟筆成秋田上

三かさねに疊みなしたるが、うばらかづらに埋れてうら悲しきを、これなむ陵よと思へば、心もかきくらまされて、更に夢・現とも分きがたし。

げにまのあたりに見奉りしは、紫宸・清涼の御座に大政き

こしめさせ給ふを、百のつかさ人は、かく賢き君ぞとて、御言かしこみて仕へまつりき。近衛院に譲りましし後も、藐姑射の山の玉の林をしめさせ給ひしに、思ひきや、麋鹿の通ふ路のみ見えて、まうづる人もなき深山のおどろの下に、神がくれ給はむとは、萬乗の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の業といふもののおそろしくも添ひたてまつりて、罪をのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつづけて、涙わき出づるが如し。夜もすがら供養し奉らばやと、陵の前の平なる石の上に座を占めて、經文靜かに誦しつつも、かつ歌詠みてたてまつる。

松山の浪のけしきはかはらじを、

かたなく君はなりましにけり。

尚こころ怠らず供養す。露いかばかり袂に深かりけむ。日は入りしほどに、山深き夜のさま常ならで、石の牀、木の葉の袞いとさむく、神清み、骨冷えて、物とはなしにすさまじき心ちせらる。(上田秋成「雨月物語」)

一一一 わが家の富

家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪。誰かいふ、狭くして且つ陋なりと。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狭しと雖も仰いで碧空を望むべく、歩して永遠を思ふに足る。

神の月日は此處にも照れば、四季も來り、風・雨・雪・霰かはる

がはる到りて興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るるを覺ゆるなり。

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開いて樹に滿つ。風ある日には、青青と霞める空より白き花ちらちらと舞ひて、一庭須臾に雪を散す。鄰家に花樹おほし、風に隨ひて、飛花わが庭に落つ。紅雨霏霏、白雪紛紛、見るがうちに、滿庭、花の衣を著く。仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。

庭隅に一株の山榭くちまあり、五月闇鬱陶しき頃、香しき花開く。主も妻も無口なれば、この花のわが家に開くは宜なりけり。



老李の背後に一株の碧梧あり。その幹亭亭として些の邪なく、わが如く直かれと教ふるに似たり。これと手水鉢の側なる八角金盤とは、葉廣うしてわが家の雨聲を多からしむ。李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾滾と地に落つる頃は、與へて喜ばせむ男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。

つくつくぼふしの聲に、世はいつしか秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃えいで、ただ一株、前の家主の植残したる黄菊も咲きいづ。名苑の花美しと云ふとも、秋のあはれ、閑寂の趣は卻てわが庭の一枝にあるべし。蛻巖（二二二）の翁ならば、獨憐（二二三）細菊、近荆扉（二二四）とや吟ぜむ。恥づらくは海内文章落布衣（二二五）と唱すべき身にあらざることを。

梁田蛻巖、明石藩の儒者。（二二三）  
一四七

屋後に一株の銀杏あり。秋深くしては満樹黄金よりも黄なり。木枯の風起れば、その葉翩翩として翻り落つ。半夜夢さめて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も庇も手水鉢も、處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落添ひて、寸金と人は云ふなる錦を、我は庭に敷きつめぬ。

木の葉おちつくしては流石に淋しげなるも、日影・月影いよいよ多くなりて、空を見、星を見るに障りなきは嬉し。

（徳富蘆花―自然と人生）

名は謹、先行と號す。水戸藩士。（二二六）

一三 寺門政次郎に答ふ

一兩年以來十數度の貴翰、尙又時時の御惠投もの、殊に當春梅花の御贈もの等、實以て御厚意淺からず。僕が頑鈍狂愚、何ゆゑ右様御眷顧下され候や、謝する所を知らず、汗顔の至に御座候。

さて慎中<sup>(三)</sup>は貴答延引も當然に候處、當二月幽厄を脱し候上は、早速一書を裁し、右數度の御厚意を謝し候筈の處、爾來僕が境界、實以て寸暇もこれなく、尤も日夕刻太白を傾け候暇はこれあり候へども、その外はとかく閑隙も得ず、今日始めて貴答に及び候。

一、先年、弘道館<sup>(三)</sup>にて貴兄御面貌は確かに相覺え候。所謂嶄然頭角、今以て心目に宛然に御座候處、追追、御詩文

<sup>(一)</sup>弘化四年十月より嘉永五年二月まで謹慎を命ぜらる。

<sup>(三)</sup>水戸藩の學校。

<sup>(三)</sup>天保十二年弘道館を開く。

<sup>(四)</sup>宋儒、陸放翁。  
(一七五—一七〇)

<sup>(五)</sup>徳川齊昭の撰せるもの。

等拜見、尙又御尊承知致候へば、近來益御研精の由、憚ながら感心仕候。老人臭き申分には候へども、御國も學校御開き以來、讀書家は澤山に相成り候へども、眞實の學者は寥寥に御座候間、國家の爲、御勵精御尤もに存候。僕などは罪名載せて幕府の籍にある身分にて、天地の一棄人に候間、理窟がましきことは一切申すまじと心がけ候へども、放翁<sup>(四)</sup>が申す如く、「大義未嘗忘君臣」の至情もだし難く、且つは度度の御細書、御深意をも推察致し、旁心事ほぼ吐露仕候。

申すまではこれなく候へども、學問は實學にこれなくしては、卻て無學にも劣り申候。弘道館<sup>(三)</sup>記中に「忠孝無<sup>(五)</sup>二、

文武不岐、學問事業不殊其效。と遊ばされ候儀、實に學者  
立志の模範、志士報國の根本に御座候はむか。今世、親孝  
行のやうなれども、御奉公は出來ぬ風の人も相見え、又  
御奉公出來候様にても、父子の中とくと致さざる向も



湖東田藤

相見え候。これら皆聖人の道  
に背けるものと存候。又少少  
書を読み候へば、何か仔細ら  
しき顔色を致し、言語等漢語  
交りにてしやらくさく候へ  
ども、劔槍等の藝一切出來申さず、文弱白面の書生と相  
成り候儀、毛唐人ならばそれにて宜しきかも相分らず

候へども、かりそめにも神州尙武の域に生れ、且つは武  
家の飯を食ひ候ものは、右様の白面の書生は風上へも  
置きかね候事、勿論に御座候。武人の愚にも困り候へど  
も、どちらと申候へば、寧ろ文弱の書生にはまさり申す  
べきか。しかし成るべきだけは、文武岐れず兼備これあ  
りたき事、これ又勿論に御座候。

學問事業その效を殊にせざるに至り候うては、なか  
なか難物なり。僕が輩、頌白に相成り候へども、今以て學  
問事業一致の場合に相成り申さず、及ばずながら心を  
用ひ候へども、修己治人の工夫、明倫正名の講究、時時刻  
刻離れ申さず候。貴兄などは妙齡の御事ゆゑ、必ず學問

事業の一致も御出來なされ候はむ。隨分御研精御尤もに御座候。

一、讀書は、博きを貴び候へども、うはすべり致候うては何程萬卷を讀み候とても、用をなしかね候はむか。古人の所謂「眼光紙背に徹る」と申す如く讀みたき事に御座候。次第次第に後世に生れ候程、讀むべき書多く相成り候。古人は六史か七史讀み候へば相濟み候が十七史又は二十一史と申す様に相成り、末が末に相成り候はば、三十史も五十史も讀み申さず候うては相成らざる譯合故、博きを貴び候中にも、その要を得候儀肝要と存候。人の持前種種有之候故、一槩には申兼ね候へども、歴

(一) 史記・前漢書 後漢書・三國志・晉書・宋書・南齊書・梁書・陳書・魏書・北齊書・周書・隋書・南史・北史・唐書・五代史。  
(二) 十七史に、宋史・遼史・金史・元史の四史を加ふ。

(三) 某讀 漢書二至レ是凡三經三手鈔一矣。初則一段事鈔三字二爲レ題。次則三兩字、今則一字。

幸甚速色起經千戈茂茂面  
周室山河存存水浸染も生  
江流舟舟岸岸惶之難也認控  
るを了了洋 手筆を了了人全  
りも了了守花もも山山世汗 せり  
の余の了了事に記甲字もも東のいもも書 飛

史等も唯ばつと讀み候よりは、何か一つ講究、著述致す心得にて讀み候方、格別に益を

得候様相覺え申候。制度の事も、兵機の事も、文辭の事も、名君賢相の行狀、その外一一記憶致すべしと存候うては、大抵の人にては中中覺えかね申候。東坡が漢書を讀み候法など面白く御座候。尙又御勘考御尤もに存候。  
一、慶元以來、人物林の如く、豪傑もおひおひに出て候

伊藤仁齋。(三六  
 七二三五)  
 荻生徂徠。(三三七  
 一三三八)  
 熊澤蕃山。(三三九  
 一三五二)  
 新井白石。(三三七  
 一三九五)  
 徂徠集卷十四に  
 日本國夷人物茂  
 聊の語あり。

北宋の司馬光、  
 温公は諡。(二六九  
 一七七八)  
 南宋の朱熹、文  
 公は諡。(二七〇  
 一八〇)  
 北宋の韓珂、魏  
 國公となれり。  
 (二六八―二七五)

處、その中にて、仁齋の學問、徂徠の文章、熊澤の經濟、新井の敏捷など皆畏るべく存候。しかし右の内、徂徠は更に名分を存ぜず、自ら東夷の人と稱し候儀、不届至極に御座候。新井も才氣絶倫に候へども、東都を張立て候志は悪むべく候。さ候へば今に在つては、右數子の長を取り、短を捨て、實學講究致し、孔子の遺意に協ひ候様、御同意企望致したき事に御座候。今世の儒者、ややもすれば唐人の事を丁寧六に申し、司馬温公、朱文公、韓魏公などと稱へ、さて新田義貞が云云、楠木正成が云云など申候類甚だ相濟まず。右様の人をば、僕は毎毎和唐人と唱へ申候、御一笑下さるべく候。その外、當世の學風、その弊少なか

らず候へども、とてもとても書中に盡しかね候ゆゑ、まづその一端を挙げ候のみに御座候。

僕は最早貴地などへ出て候事は終身これなく候間、拜面もむづかしく候處、貴兄は御墓參、御對面等にて御歸郷も御自由ゆゑ、もし來春など一寸も御歸郷に相成り候はば、種種存候だけの事は御切磋商申すべく候。

まづは今日は前文御申譯旁、一書を裁し候事に御座候。併しながら御覽のとほり亂筆、さぞ御讀みかねなされ候はむと閣筆候。以上。(藤田東湖)

一四 修辭上の轉義

(一) Trope.

(二) High collar.

修辭上で轉義と稱するものは、或語の意義を轉じて、普通ならぬ意味で用ひた語をいふのである。例へば「白きこと雪の如し」といふと、その「雪」は轉義である。蓋し普通語の「雪」には白いといふことの外に、空から降るものであること、冷かなこと、消え易いことなどの、様様の意味を含んでゐるのであるが、この場合には、唯「白いもの」といふ外に何の意味をも伴はない。これが轉義の轉義たる所以である。更に他の例をとると、「花笑ふ」と云つても、花は齒も出さず、笑ひ聲も漏さぬ。「怒濤」と云つても、濤には怒るといふ意志は無い。「ハイカラとチヨン鬻」とが議論をしてゐる。といふ文中のハイカラは、唯高い襟といふこととでなくて、高い襟を著けた男、或は首の回らない程なカラを好む當世風の男といふ意味である。チヨン鬻も勿論鬻を指すのではなくて、チヨン鬻を結つてゐる古風な男といふこととである。かかる種類の語を悉く轉義といふのである。

(三) Metaphor.

(四) Simile.

轉義は西洋の修辭學者の間に一時盛に研究せられたもので、頗る綿密な分類も出來てゐるが、その主要なものは、明喩・暗喩・換喩・活喩の四つである。

明喩・暗喩はともに比喻であつて、種類の違つたものを捉へて來て、當面の事物を形容するものである。「雪のやうな紙」人情紙の如しは明喩、「君子の徳は風にして、小人の徳は草なり。草に風を加ふれば必ず伏す」といふのは暗喩である。前者

は「やうな」如し「似たり」などの語を以て、その比喩なることを明かに示してゐるが、後者はこれ等の語を全く省いたものである。この兩者を比較すると、暗喩は明喩よりも有力である。しかし暗喩では意味の明瞭を缺く虞のある場合には、明喩を用ひねばならぬ。いづれにしても、比喩として用ひるものは、讀者の熟知してゐる、なるべく具體的なものでなくては有效でない。

(二〇〇)  
古今集の歌。

龍田川紅葉亂れて流るめり、

渡らば錦なかや絶えなむ。

梓弓春立ちしより、年月の

射るが如くに思ほゆるかな。

(三) Metonymy.  
(四) Synecdoche.

換喩は、或は細別して換喩、提喩に分つ。狭義の換喩とは或事物の名を以て、實際上それと關係ある事物の名に代用するもので、原因と結果、器械と使用者、記號と實物などを相代へて用ひたもの、例へば近松の著書を讀むことを「近松を讀む」といひ、武家を「甲冑の家」といひ、帝國大學生を「角帽」といふ類は皆換喩である。提喩は事物の一部分の名を擧げて全體に代へ、或は全體の名を以て一部分を表すもので、「白帆歸る」と云つて、白帆をかけた船の歸ることをいひ、「花咲く」と云つて、櫻の咲くことを指す類である。しかし換喩と提喩との區別は往往明瞭ならぬことがあるつて、學者の間にも異説がある程である。且つ二者ともに、その物の特質又はそれと關係

の深い周圍の事情中で、最も主要な點を摘出して、ここに注  
意を集中せしめようとするもので、實用上からいふと、その  
間に區別を立てる必要はない。だから二者を一括して換喩  
と稱へてゐる學者も尠くない。

(二) 井原西鶴の句。

鯛は花は見ぬ里もあり、今日の月。

鯛とは美味、花は美觀の義である。美味にも美觀にも全く接  
し得ざる僻遠の地に住む者も、今日の明月のみは都會の人  
にも劣らず樂しむであらうと云つたので、この句の力は實  
に「鯛は花は」といふ換喩にある。

(三) 與謝蕪村の句。

五月雨や、物語り行く蓑と傘。

「蓑と傘」とは勿論蓑著た百姓と、傘をさした庄屋か地主など

の如き男を云ふのである。若しこれを「物語り行く人二人」な  
どとすれば、極めて平凡であらう。「蓑と傘」といふ轉義の爲に、  
語りあふ者の姿が畫を見る様に想像せられる。

(三) Personification.

活喩は又擬人法とも稱する。無生物を生物の如く敘した  
り、或は下等動物を人類の如くに敘するもので、巧に用ひた  
ものは、よく想像力を刺戟する。

(四) 源俊賴の歌。

暮れはてぬ、歸さは送れ山櫻、

誰がために來てまどふとか知る。

(五) 山崎宗鑑の句。

手をついて歌申し上ぐる蛙かな。

如何なる轉義も、濫用すれば卻て文章の力を殺ぐもので  
あるが、ことに活喩は注意して用ひないと、滑稽に終ること



(一) Coleridge.  
(1772-1834)  
英國の文學者。

が多い。この蛙の活喩のごときも、滑稽に用ひたからこそ面白いのであるが、眞面目な文章には避けねばならぬ。就中、抽象的の事物に活喩を用ひることは、日本語の習慣上極めて稀である。西洋ですらコレリッヂのごときはこれが濫用を戒めて、抽象せる事物に活喩を用ひるをこと好み、宗教は人世を右にし、他界を左にして、かの蒼穹より降り降り」といふが如き言語、文章を壮大なりとするものは、純正なる感情の無い者である」と云つてゐる。

畢竟轉義は舊套なものを斬新にし、高尚なものを卑近にし、隱微なものを著明にし、理解力に訴ふるものを想像力に訴へて、文章を明晰にし、適勁にするものであるが、若し虚飾

(二) Emerson.  
(1803-1882)  
米國の哲學者にして詩人。

に陥ると、天真の活氣を失ひ、普通語よりも文章を曖昧、纖弱ならしむるに至るであらう。エマーソン曰く、「轉義は人間の言語の一大部分を作るものであつて、これなくして不愉快ならぬ會話をなし得るものは極めて稀である。轉義は會話をして光彩あらしめる。巧妙なる比喩の類を耳にすれば、何人も終生忘れることが出来ぬ」と。又曰く、「その内容に極めて重大なるものあるにあらでは、全く轉義のない文章は成立し得ないものである」と。

エマーソンの説は疑を容れない。しかし若し轉義の必要のない程な重大なる内容を有する文章が出来たならば、これ實に人間の最も力ある文章であらう。天にまします我等

の父よ、願はくはこの憐むべき羊の羣を救ひ給へ」といふ類の修辭は、充實した内容のない祈禱に、よく反覆される。若しかの牧師を捉へて濁流に投げこんで見たなら、その美しい轉義が消滅して、「助けてくれい」といふ天真爛漫な叫喚に變ずるであらう。この聲には、大慈大悲の佛神のみならず、凡夫衆生も皆惻隱の心を起して駈附けようとする。重大なる内容には轉義の用がないとは、これを言ふのである。

文章の最も人を動かすものは、内容の力である。たださまでに重大ならぬ内容にもよく傾聽せしむるものは、轉義の力によることが多いのである。

一五 今様と朗詠

萬劫年ふる

萬劫年ふる龜山の

下は泉の深ければ、

苔むす巖屋に松生ひて、

梢に鶴こそ遊ぶなれ。

松の木蔭\*

松の木蔭に立ちよれば、

千年の緑は身にしめども、

梅が枝、挿頭にさしつれば、

春の雪こそ降りかかれ。

古き都

古き都を來てみれば、

淺茅が原とぞなりにける。

月の光はくまなくて、

秋風のみぞ身にはしむ。

早春

\*後に掲げたる朗詠の翻譯なるべし。

氣霽風梳新柳髮

冰消浪洗舊苔鬚

子曰

倚松根而摩腰

千年之翠滿手

折梅花而插頭

二月之雪落衣

草

瓢箪屢空草滋顏淵之巷

藜藿深鎖雨濕原憲之樞

松

十八公榮霜後露

一千年色雪中深

顏淵は孔子の高弟聖と稱せらる。原憲も亦孔門の賢人なり。もに貧にして道を楽しめり。

同三月 今 年 一 月 廿 八 日 山 松 一 千 年 色 雪 中 深

朗詠集音譜

山

泰山不讓土壤故能成其高 河海不厭細流故能成其深  
山復山何工削成青巖之形 水復水誰家染出碧潭之色

祝

嘉辰令月歡無極 萬歲千秋樂未央  
長生殿裏春秋富 不老門前日月遲

一六 俚諺論

羅馬の一詩人がエピグラムを蜜蜂に譬へて、螿あり、蜜あり、軀は小さし。と言へるは、すべての俚諺にとはいひがたきも、その最も巧妙なるものには恰當の語なるべし。俚諺の上乗なるものは多くはこの三者を具ふ。言短くして意義味ふ

(三) Epigram 警句

べく、寸鐵人を刺すの妙あり。

人口に膾炙し易からむことを求むる故に、俚諺はおのづから律語を爲す傾あり。我が國語にては、五又は七が自らなる律呂なれば、我が國の俚諺にはこの律に従へるもの甚だ多し。雉子も鳴かずばうたれまい。心の鬼が身を責める。といふ如く、最もよく人口に膾炙せるものにして、七五の調子をなせるはいと多し。人と屏風はすぐには立たぬ。思ふ念力、岩でもとほす。身を捨ててこそ浮む瀬もあれ。などは七七の調子をなして語呂頗るよし。十で神童、十五で才子、二十過ぎてはただの人。といふも、その語に律あり。右と同じ理由により、同語または同音を重ねたる類のものも多し。例へば、多勢に

無勢。短氣は損氣。弱り目に祟り目。處かはれば品かはる。藥九層倍。勝つて兜の緒をしめよ。といふが如し。

かく律を成し、尾韻又は頭音を合すこと、詩の句法に似たる所あるのみならず、俚諺に抽象の語少なく、おほくは具體的に言ひなして感動の強からむことを求め、又これが爲に屢、誇張の言を喜ぶなども、それが詩歌に似たる點なり。この故に、諺にて物の度量をいふには、その數又は量を定めていふを好む。七たびさがして人を疑へ。人の噂も七十五日。預り物は半分の主。などの類は數ふるに違あらず。數の中にて最も好んで用ふるは三の數なるべし。三度目が定の目。三年たてば三つになる。懺悔話をすれば三年の罪が滅びる。三人

よれば文殊の智慧。三人よれば人中。朝起きは三文の徳。その他なほ多かるべし。又用心は臆病にせよ。黒犬にくはれて、灰たれの和滓かすにおそれる。などは誇張していふによりてその意味を成せるものの例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見實まことしやかならぬ語句、即ちパラドックスを用ふるを喜ぶ。この種の諺に深く味ふべきもの少なからず。急がばまはれ。言はぬは言ふに勝る。逢ふは別のはじめ。兄弟は他人の始まり。論語讀の論語知らず。人を使ふは使はれる。など、その例なるべし。かく相反するが如き事柄の中に、卻て相通ずる所あるを發見するは、深邃なる智慧の一特徴なり。

\* Paradox.  
逆語。

パラドックスといふにはあらずとも、總じて反對のものを相竝ぶるは、吾人の注意を捕ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。骨折損の草臥儲くら。聞いて極樂、見て地獄。問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥。長者の萬燈より貧者の一燈。などその例なり。

反對を竝ぶるのみならず、總じて二種の事柄を相竝べてそれを比照するは俚諺の一大特色なり。これ俚諺の比喩に富める所以にして、その比喩の極めて妙なる、詩人の作としても恥かしからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは多くこの類にあり。今思ひ出づるに従うてその三四の例を掲げむか。馬には乗りて見よ、人には添うて見よ。旅は道づれ、世は

なさけ」といふ如きは、幾たび唱するもその趣味の津津たるを覺ゆ。花は櫻木、人は武士。これ我が國民の以てそが理想を誇るに足るものの一なるべし。佛法と藁屋の雨は出て聞け。風流の心に富める國民ならで、誰かこれをえ言ひいでむ。これを口ずさみ見よ。如何に詩心道心宗教心の相結びてなせる、高雅幽玄なる妙趣の浮び來るぞ。

かく二つの事を並べ出でて相比照することなく、ただ普通の暗喩を用ひたるものも頗る多し。例へば「商賣は牛の涎」。「祕事は睫」といふが如し。而して更にその喩のみを掲げて他の意味を匂はせたるものも、その數多かるべし。蟹は甲に似せて穴を掘る。「目糞、鼻糞を嗤ふ」といふ如きはこの例なり。

かく比喩の用ひやうは種種あれど、そのこれを用ふるは寓言に於ける用ひ方とは同じからず。「目糞、鼻糞を嗤ふ」といふ如きは多少寓言に近よれる所あるが如く思はるれど、俚諺と寓言とは、後者は敘事物語の體裁を具へ、前者は然らざる點に於て全く相異なり。同じく意を寓して比喩を用ふるも寓言はこれを出來事又は動作として語り、俚諺は時間に結ばずして、唯常恆の事實として語るなり。(大西祝)

一七 「ヴェニス」の商人」法廷の場 上

本課の如く文學史に關する講説に資すべき材料にして文章や平易なるものは、學生の自修に任ずるも可なるべければ、特に小活字を用ひて紙數の節約を圖りたり。以下各卷之に準ず。

ヴェニス公爵「いかにアントニオはあるか。さてさてその方は氣の毒な者

(一) 有名なる沙翁劇の外題。  
(二) 伊太利ヴェニス國主。  
(三) 俠氣ある大商人にて、友人パッサニオの火急なる必要に應ぜむが爲に、かねて憎める猶太人シャイロックより、己が肉一斤を抵當として三千兩を借る。然るに放資せる貿易船難破して、期を過ぎて返金する能はず。

\*高利貸を業とする殘忍なる猶太人。屢アントニオに公衆の間に面罵せられ、復讐の期を待つ

ぢや。相手方のシャイロックは頑石同然の人でなし、慈悲憐愍の心とては微塵ほども無い奴なれば、さぞ心を苦しむることであらう。アントニオ「承りますれば、上には御心に掛けさせられ、段段相手方をお諭し下されましたげに御座りませう、あくまで執念深く申し張りまする上からは、所詮免れ難き國法の表、この上は觀念仕りまして、心靜かに彼が邪慳の犠牲と相成りまする覺悟に御座りまする。」

公誰そある、シャイロックを呼入れい。〔シャイロック登場〕

公「シャイロック、世上の者も思ひ、予も亦左様存じ居る事ぢやが、何と其方がこの度の訴訟は、よも本心ではあるまい。事落著の間際と相成り、俄かに打つて變り、慈悲を施し、今責めるこの商人の肉一斤は申すもさらなり、元金の大半をも免除なし、重ね重ねの案外に世人を驚かさむ所存であらうな。近頃引續いて彼が身に降りかかりし不慮の損亡、流石の大商人なれども、進退谷まる體たらく、よしや心鐵石の如き、殘忍無慈悲を習慣の土耳其韃靼の夷たりとも、何條憐憫を抱かざらむ。」

これやシャイロック、情ある返答を聞きたいものぢやの。〔シャイロック「手前の存じ寄り」先達申し上げて置きました。天帝に誓うた上は、證文通りには是非受取らねばなりませぬ。それをならぬと仰有りますれば、御政道は暗闇、ヴェニスの國法は無いも同然で御座ります。か様申したなら、なぜ三千兩といふ金は取らないで、役にも立たぬ人肉をたつた一斤やそこら取るのかと、御不審も御座りませう。その御返事は致しませぬが、言はば手前の好き勝手と申したら如何で御座ります。譬へば、鼠めがあばれて困る、それが憎さに、若し鼠を殺して呉れたら、報に一萬兩やらうと云ふも好き勝手。何とそんなものでは御座りませぬか。世間には、豕を見れば胸がむかつき、猫を見れば氣が狂ふといふ人もある。それもこれも銘銘の持前。とかく好、不好は人の心の操り、絲、百八煩惱の元緒。何で豕が氣にくはぬ、何で猫が嫌だと問はれても、理は言はれぬ。蟲の好かねえアントニオ、三千兩の抵當に肉一斤、てんで桁に合はぬ取引も、深い怨があるによつて意趣返しがしたいばかり、

（二） アントニオの友人にしてアントニオの災厄を聞き、金を懐にしてヴェニスに急行すれば、恩人は既にシャイロツクに訴へられて囹圄の裏にありしなり。

（二） Jew 猶太人。



グ ヲ ロ イ ャ シ

な返事をする義務はない。『好かぬからとて殺すといふは人情では無いわい。』憎む程なら殺したいと思ふのが人情の當り前だ。『氣にくはぬと憎いとは同じでは無いぞよ。』何だと。お前さんは蝮に二度咬ませる氣か。『アン、あ、これこれ、相手にこそよれ、問答無益、チユウに道理を言聞かするは、親羊を鳴かす狼に、なぜ子羊を取つたと詰り、峯の松風、磯打つ浪に音を立てるなと諭すも同然、凡そ世の中に頑固なるもの、チユウの心に越ゆるはなし。もうもう何も言うて下されます

外に仔細は御座りませぬ。何とお聞分け下されまし  
たか。『バ、サニオ、餘りといへば人情知らず。その様な事が、殘忍非道なこの御訴訟の申し開きになると思ふか。』  
シ、お前さんの氣に入る様

な。この上は片時も早うお裁き受け、彼がなす儘になりませう。』  
『これやシャイロツク、三千兩をこれこの通り、六千兩にもして返すのぢやわい。』シ、六千兩が六萬兩でも、いやさ、六千萬兩でも、取る氣は無  
い。證文通りが望だ。『公、さばかり他に辛うして、その身に咎の下らむ時、如何にして慈悲を求めむとするぞ。』曲つた事をせぬ者が、どんな咎を憚りませうぞい。近い例が、お前様方のお邸で飼うて御座る大勢の奴隸衆、金の威光と、お主の威光で、牛馬同様にこき使うて御座らつしやるを、何と引上げてお塔様になされませぬ。なぜあの様な痛はしい酷い仕事をおさせなされます。御前様と同じ様に、柔かい寢臺に寝せて、なぜ旨い物を喰べさせはなさらぬのだ。』と申したなら、あれは奴隸だ、買取つたもの故おれのままだ。』と、さ、仰有るで御座りませう。まつその通り、あの男の肉一斤は大金出して買った代物。わしの物だからわし  
が取るのだ。それをならぬと仰有れば、ヴェニスの國法は反古同然、御政道が立ちますまいぞよ。御裁判下されませうや。如何に御座りまする。



\* 法學博士にして  
パッサニオの妻  
ボオシアの従弟  
なり。

公「予が國主たるの威權を以て、法廷を閉ぢむも心任せぢや。なれども豫てこの訴訟は世に聞えたるベラリオ博士を相招き、取裁かすべき手筈なれば程なくこれへ出頭なさむ。」(この時博士の書狀を携へたる者來れりと報す)

### 一八 「ヴェニス」の商人「法廷」の場 中

(パッサニオの妻ボオシア、ベラリオ博士の代理者パルサザアと稱し、法學博士の服裝にて登場)

公「老博士のもとより參られたるか。」ボ「オシヤ」左様に御座りまする。公「よくこそ參られたれ。先づ席に著かせられよ。儲その許には、只今これにて取調中の訴訟の始終を御存じなりや。」ボ「委細承知致し居りまする。この中いづれが當の商人にて、いづれがヂェウで御座りますな。」

公「アントニオ、シャイロック、兩人共に前へ出い。」

ボ「シャイロックと申すはその方か。」シ「シャイロックは手前で御座りまする。」ボ「さてさて、その方が今度の訴訟は奇怪至極の訴ぢやの。とはいへ、手續に邪なければ、ヴェニスの國法の表として、これを斥くべき道理

は無い。これやアントニオ、そちが一命は訴訟人シャイロックが心のままとな。」ア「左様に申し居りまする。」ボ「證文の面は毛頭も相違ないか。」

ア「相違御座りませぬ。」ボ「然らむには、シャイロックに於て情をかけねばなるまいぞよ。」シ「とは又どういふ據ない仔細が御座りまして、理をお聞かせ下さりませ。」ボ「ああいや、情は強ふべきものでは無い。春の小雨の音なきごとく、自然に降つて人を潤す。その德澤は二重にして、受くるものにも幸あれば、授くるものはた幸なり。畢竟人君の偉德にして、衆徳の集まるところぢや。この德、王者の胸に宿れば、光寶冠に百倍す。笏は人の世の威力を示して、目に見ゆる尊嚴の飾となれども、慈悲の德はこれに彌増し、天つ御神のおほん德慈悲を以て義理をやはらげ、情を以て法度のそなはらぬを補うてこそ、王道初めて天道に合ふの道理ぢや。ぢやによつてシャイロック、その方の申條は義理には悖らず、掟には協うたれども、この道理をよう思へ。若しただ一途に義理を責め、政道の表のみを強ひて立抜かむとする時は、罪業深き人の身の、

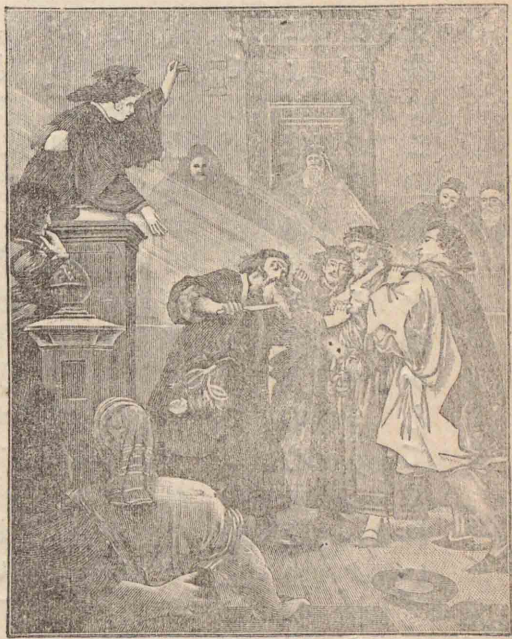
誰かはこの世に救を得む。明け暮れ神に慈悲を祈るは、取りも直さず餘の人に慈悲を懸けよの誨ならずや。かくまで言葉を費すも、義理一片の訴をなだめむと思へばこそ。承引せずば是非に及ばず。のつびきならぬ掟の表、それなる商人をば重き罪科に處せねばならぬ。シヤ、手前の所爲が曲事なら、どんな御罰でも受けませう。御法通り、證文通り、償をお渡し下さりませ。

「アントニオは金子を拂ふこと相協はぬか。」  
「ああいや、その金子はまつこの通り、彼に代り、手前より支拂ひまするで御座ります。はい、元金の倍額に御座ります。若しこれにても不足と申さば、手前の手なり、首なり、心臓なり、抵當に致しまして、十倍にして支拂ひます。なほこれにても承引せずば、訴訟沙汰は表向にて、實は人を陥れて殺さむ底意と存じますれば、何卒お上の御威光にて、大義公道の爲、聊か法を曲げさせられ、この人鬼めを御取押へ下されませう。御願ひ申し上げます。ああいや、その儀は相成らぬ。ヴェニス國廣しと雖も、いかな

\* Daniel.  
ヘブリエーの  
裁判の神。

る權威を以てするも、掟を枉ぐる力は無いぞ。一たび桶を作る時は、百の過これに倣ひ、長く國家の禍根とならむ。その儀は固く相成らぬぞ。シヤ、ダニエル様の再來、取りも直さずダニエル様、お若いに似ぬ、明判官様、恐れ入つたる御發明。」

「どうかその證文を見せてください。」  
「これに御座ります。憚りながら、これに御座ります。」  
「シヤ、ロック、何と、この金額を二倍にして返濟せむと申し居るではないか。」  
「誓うた上は、誓うた上は、天帝に誓うた上は、おのが魂に背かれませうかい。ヴェニス一國と取換つことにしても、否で御座る。」  
「はて、この證文は期限已に切れたれば、國法の表によれば、それなる商人の心元より肉一斤を切取ること、それなるデユウが心の儘……これやシヤ、ロック、情をかけよ。三倍の金子を受取り、身共にこの證文を裂かしてくれい。」  
「シヤ、證文通りの支拂が濟んだ後なら、お心任せになさりませ。……お見受け申した處、お立派な判官様



法の廷の場

法や掟もよう御存じ、御理會も道理千萬、御國法の黒柱とも存じますから、その御國法を楯に御願ひを申します。早う裁判して下さりませ。心にかうと誓うた上は、人間の舌の力ぢやあ、この心は動かされぬ。證文通りのお裁きをお願

ひ申し上げます。ア私よりも申し上げます。何卒お取裁き下されますやう、お願ひ申し上げます。

ボ「この上は是非もなし。襟を開き、刃を受くる用意いたせ。」

シ「さてさて天晴な判官様、年に似合はぬ偉いお方ぢや。」

ボ「この證文に見えたる償は正しく國法の旨意に協ひて異議を挿む

べきものにあらず。」シ「御意の通り、御意の通り。儲儲發明な、依怙最眞のない判官様、見かけは若うても、分別は老人も及ばぬ。さて偉いお方様ぢや。」

ボ「この上は臂を露す仕度いたせ。」

シ「はいはい。臂で御座る。證文に左様認めて御座ります。……」すぐ臂元より」と御座りませうがな。」ボ「いかにも。……肉を量る秤は有るか。」

シ「はいはい。」

ボ「シャイロック、その方自辨にて、外科醫者を呼寄せおけ、傷口を止めぬ時は、命を失ふも圖られねば。」シ「左様な事が證文に認めて御座りまするか。」ボ「いや、認めては無けれども、さばかりの情を掛くるは當然ぢやわい。」シ「手前は會得致しませぬ。證文に書いて御座りませぬ。」

ボ「商人、何も申す事はないか。」ア「とくより覺悟致し居りますれば、改めて申すほどの事も御座りませぬ。」

シ「何のかのと時がたつ。御宣告を願ひまする。」

ボ「これなる商人アントニオの肉一斤はその方の物ぢや。法廷これを許し、國法これを與ふるぞ。」  
シ「さつても公平な明判官様。」  
ボ「この上はその方、是非自ら手を下して、彼が曾元より肉一斤を切取るべし。國法これを認め、法廷これを許すぞ。」  
シ「さつても博學な判官様だ。……御宣告だ。覺悟しろ。」

一九 「ヴェニス」の商人」法廷の場下

ボ「待て、暫く、今一言申す事あり。これこの證文には、血汐は只の一滴たりとも、その方に遣すと書いてはないぞ。肉一斤と明白に書いたる上は、證文通り、肉一斤を取らむは儘。……なれども切取るそのはづみに、基督信者が鮮血の只一滴だに灑ぐに於ては、地所も家財も悉く、ヴェニスの國法に依つて、ヴェニスの國庫に沒收致すぞ。」  
グラ「シヤ、依怙最眞の無い判官様、どうだ、ヂュウ。さて博學な判官様だ。」

シ「それがお掟で御座りますか。」ボ「疑はば自ら調べ見よ。強ひて條文を楯となし、偏に嚴罰を課せむとする故、己に出づるもの己に返り、その方が望む以上の嚴重なる裁きも致さにやならぬ。」  
ク「成る程博學な判官様。どうだ、ヂュウ。成る程博學な判官様だ。」  
シ「それぢや先方の望どほり、證文の三倍で、其奴を許してやりまする。」  
バ「その金は即ちここに。」  
ボ「控へい。ヂュウは飽くまで掟どほり、國法どほりに裁き遣す。急ぐには及ばぬ、控へて居れ。……やいヂュウ、科料の外は何物たりとも取立つる事は罷成らぬぞ。」  
ク「どうだ、ヂュウ。成る程公平な判官様。成る程博學な判官様だ。」  
ボ「いざさらば、肉を切取る準備致せ。但し血を流す事は罷成らぬ。まつた曾の肉一斤の外を切取る事は相成らぬぞ。若し聊かたりとも分量相違いたすに於ては、よしや分釐の輕重たりとも、いやさ、髮の毛一筋の相違たりとも、秤皿の上に生ずるに於ては、その方の命は無いぞ。そ

ちが家財は悉くヴェニス<sup>の</sup>國庫に沒收いたすぞ。

ケ「今ダニエル様。今ダニエル様。どうだ、もうかうなつちやあ、ぐうの音も出やあしまい。さまあ見ろ。」

ホ「何とてデユウは躊躇致すぞ。償を取らぬか。シ「元金だけを取つて、お暇が戴きたう御座りまする。」バ「とくより準備致して居る。即ちこれに。」

ホ「あいや、場所にこそよれ、法廷にて、一旦受取らぬと申せし上は、彼には飽く迄も掟どほり、證文通りの償のみを受取らせい。」

ケ「ダニエル様も一つおまけにダニエル様。おいデユウ、とんだ好い語を教へてくれた、禮をいふぞよ。」

シ「すれや元金だけも受取る事が出来ませぬか。ホ「償の外は一切協はぬ。命がけにて切取るか、どうぢや。」シ「ちええ、この上はどうとも勝手にしやがれ。もう論判は無駄なこつた。」

ホ「待て、シャイロック。まだその方には御用がある。自儘の退席罷成らぬぞ。…ヴェニスの國法によれば、直接にもあれ、間接にもあれ、若し外國人

にして當ヴェニスの國人を殺害なさむと企てし事露見に及べば、その財産を二つに分ち、當の相手はその半を取り、半は國庫に沒收なし、猶犯人の一命は、偏に公爵の仁恕に任せ、何人たりともこの儀について異議を挟むを得ざるの定。その方が罪狀は正しくこれなり。直接にも又間接にも、これなる商人が生命を奪はむとせし事明白なれば、その罪免るべくもあらず。この上は地にひれ伏して公爵のお慈悲をお願ひ申せ。」

ホ「この方の心の汝等と異なるを知らせむ爲、願を聞く迄もなく、その方が一命は赦し遣す。扱財産の一半はアントニオに取らせ、残る一半は當國庫に沒收せむ。但し悔悟の實見えなば、科料ばかりにて差許さむ。」ホ「それは國庫に對する分、アントニオへは制限のとほり。」

シ「いやいや、赦免は望で御座らぬ。命も何もかも取上げて下さりませ。大黒柱を抜かれるは、家を取られるも同じ事、暮し元手の財産を取上げる位なら、命を取つて下さりませ。」

「<sup>ホ</sup>アントニオ情をかけて遣す氣が、どうぢや。ア、憚りながら、公爵様始  
め御列席の方方へ申し上げます。シャイロックが財産一半を料料に  
て御免除あるやう、只管願ひ奉ります。又残る一半は、私當分の閒預  
り置き、かねてシャイロックの娘と結婚致して居る紳士に相渡したう  
御座ります。なほこの上に二ヶ條のお願、……第一シャイロックこと  
かく御仁惠を蒙りましたる上は、只今から基督信者と相成ります  
やう。第二には死後の一切の財産を件の娘夫婦に譲るといふ證書を  
これにて認めまするやう、何卒御申し附け下されたく御願ひ申し上  
げまする。」

「<sup>公</sup>いづれも履行致さるべし。若し相背くに於ては免除の儀は相協は  
ぬぞ。」<sup>ホ</sup>「シャイロック、異存は無いか。どうぢや。」

「<sup>シヤ</sup>異存御座りませぬ。」<sup>ホ</sup>書記役、財産讓渡の證文を認めい。「<sup>シヤ</sup>何卒お暇  
を下し置かれませう。氣分が勝れませねば、證文は後からお送り下さ  
れ、宅にて調印仕りまする。」<sup>公</sup>退席は差許すが申し付けたる事を違へ

まいぞよ。(坪内逍遙譯)

二〇 芭蕉と蕪村との句

芭蕉

古池や、蛙飛びこむ水の音。

雲雀より上にやすらふ峠かな。

五月雨をあつめて早し、最上川。

松尾芭蕉筆蹟

荒海や、佐渡に横ふ天の川。

二〇 芭蕉と蕪村との句

一〇一

明月や、池をめぐりて夜もすがら。

物言へば唇寒し、秋の風。

金屏の松のふるびや、冬ごもり。

燕

村

春の海、終日のたりのたりかな。

さしぬきを足で脱ぐ夜や、朧月。

時鳥、平安城をすぢかひに。



與謝村筆蹟

明月や、夜は人住まぬ峯の茶屋。

三徑の十歩に盡きて、蓼の花。

化けさうな傘かす寺の時雨かな。

### 二一 風雅論

東海道の汽車の窗より富士山を眺めても、風雅の嗜ある人となき人とは、その興味を感じる度に於て大いなる相違あるべし。風雅の嗜は何人にもあり得べく、又何人にもありたきものなり。

世には風雅人なる者あり。兔角風雅をば我が物とのみ心得居るの癖あり。我が物となすは可なり、ただ我が専有にして人聞の共有物たらずと爲すは不可なり。世を避け、俗を脱

し、山林に幽棲し、花鳥風月の外、相手となすべきものなき隠居、もしくは詩歌・俳諧・書畫・骨董・茶の湯・插花・音樂等の技藝及び鑑識に長じたる専門の知識ある者、もしくはこれ等を致すの資力ある者の如きは、世の所謂風雅の仲間たる特權を有する輩なり。これ或は然るべし。されど風雅の嗜は何人もあり得べし。その共通的なるは、その根源を人の心に置けばなり。

風雅とは人の境遇に限らず、その教養の有無に限らず、その資力の多寡に限らず、何人にも、優美なる心を以て、宇宙と人とに接して感得するもの、即ちこれのみ。風雅の嗜とは、恆にこの心を失ふなきを謂ふのみ。風雅は必ずしも萬卷の

\*百敷の大宮人は  
暇あれや、櫻か  
ざして今日もく  
らした。新古今  
集、山部赤人

書を讀み、天地神人の奥理を究めたる學者にのみ存せず。一字をも解せざる田夫も、犁を手にして、春霞の棚引く裏より、芙蓉峯の白雪の冠を露したるを見て、美なるかなといふ快感を生じ來りたる刹那は、即ち風雅の人たるなり。風雅は必ずしも櫻かざして遊ぶ大宮人のみに限らず、頭上に戴く薪の束に一朵の山櫻を挿み、その心悠悠として、勞を忘るる大原女、亦これ風雅の人たるなり。唯肝要なるは、この心を恆に存して失ふことなきと、この心を練磨・教養して愈、その眞醇に近からしむると、これのみ。

風雅は必ずしも外物に存せず、一生、珍畫・名器の裏にありても、遂に風雅の何物たるを解せざるものあり。必ずしも技



藝に存せず、世には詩人にして、畫師にして、音樂者にして、俳諧師にして、俗物あり。又その職業上より見れば、如何にも俗物たるべき者にして、然らざるものあり。人若し風雅の嗜あるに於ては、その技藝・資力はそれを助成するに力あるべきを疑はずと雖も、これあるが爲に、風雅はここにありと斷言する能はず。否寧ろこれなきも、苟もその心にして存するあらば、何人も風雅にてあり得べしと思ふ。生田の森の戦に梅花を簞に插みたる梶原景季を見よ。風雅の風雅たる、それここにあらむ。

風雅の嗜は、人の一生をして興味多からしむ。仰いて浮雲の白きを視、俯して百花の紅なるを觀れば、吾人は、頓に自己

を天地の懷に投ずるの感あり。電氣燈を點ずるは、何處にても自在に爲し得ることにあらず、而も一片の明月、何人かこれを眺むるを禁じ得るものぞ。風雅は貴族的にもあり、しかも最も多くは平民的に存す。吾人は風雅の嗜を世に普及せしむる事、最も世道・人心の改善に於ける要件たるを見る。

風雅の嗜ある者は自ら氣品あり。何となれば利害得失の外に心目を遊ばしむる天地を有すればなり。又自ら餘裕あり。何となれば社會の暗黒なる一面を見ると同時に、必ず他の光明なる一面を見ればなり。又如何なる場合にも、その樂しみを失はず。何となれば現在の齷齪たる世にありて、卻て宇宙と人との美を我が心に吸收するを得ればなり。風雅の

\* 太田垣氏。(四四五  
一三五)

嗜なき者は、雪降れば寒を厭ひ、歩行の難澀を厭ひ、雪除け代の支出を厭ひて、雪を呪ふの外に心なし。されど少しく風雅の嗜ある者は、嚴冬の枯木時ならぬ花をつくる奇觀を愛せずんばあらず。風雅の嗜ある者は人を怨みず、從容としてその境遇を楽しむ。蓮月尼の歌に曰く、

宿かさぬ人のつらさをなさけにて、

おぼろ月夜の花の下ぶし。

と。若しかくの如く觀じ來らば、人生何くに處して洒然たらざらむや。人或は千金にて茶碗を購ひ、萬金にて畫を求め、風雅ここにありと爲す。若し主人にして、眞に風雅を解し、且つその力能くこれを致すに餘りあらば、吾人は敢てこれを拒

まじ。只徒に器物の末に營營とし、漫に多きを貪り、奇に誇らば、これ玩物喪志の類のみ、豈に風雅と謂はむや。新聞の插畫を壁に張りつけ、今戸燒の茶碗にて番茶を喫しても、その心ここに存せば、尙風雅たるを失はず。(徳富蘇峯一日曜講壇)

一一一 能損の道

人皆得むことを思ふ。得るは益の道なり。得ることを思ふもよし。善を益し、徳を益す、よからざること無し。されど失はむことを思ふもまたよからむ。失ふは損の道なり。失ふことを思ふもよからずや。不善を損し、不徳を損し、無功を損す、よからざること無きなり。

益と損と、兩面にして一枚、異途にして同歸なり。益の道は日に加ふ、損の道は日に減ず。益の道は務めて收む、損の道は務めて散ず。甚だ同じからざるが如し、しかも大いに異ならざるものなり。

花を養ひ、果を獲るの法、土を培ひ、糞を施すは益の道なり、益の道を盡さずんば、美花、碩果を致し難し。雜草を除き、冗枝を翦るは損の道なり。損の道を取らずんば、また美花、碩果を致し難きなり。益の道は能くこれを盡すを得るの時あり、能くこれを盡すを得ざるの時あり。損の道はこれを取るを得ざるの時無し。能益の道を全うするを得る時は論無し、能益の道を盡すを得ざる時は、能損の道を取るべし。

人の、上には父兄の吾を護るあり、外には師友の吾を誨ふるあり、衣食充足し、學資豐饒にして、學に従ふ者の如きは、日々に勉學するが、これ益の道にして、惡友を遠離し、戲樂を驅除するが、これ損の道なり。人の、上に父兄の吾を護るなく、外に師友の吾を誨ふる無くして、瓢箪屢、空しく、衣服時あつて備はらざる者の如きは、能益の道を盡さむとして、しかも盡すに由無し、ただ當に損の道を取りて、嗜欲を損し、雜念を損し、以て毫絲の餘りを積むべきのみ。損して已まずんば、漸くにして益の道を取るを得るに至るべきなり。此の理を解せずして、益の道を取るを得ざるに苦しみ、焦慮煩悶するは甚だおろかなり。

盆中の樹は能く損の道を盡すによつて其の壽も長く、其の勢も盛なるを得。寤通は命なり、人は時に思ふに任せざる境に在らざる能はざる時あり。ざる時は、益の道は能く盡し難し。ただ損の道を取りて幾時を經べし。日月廻轉、復おのづからにして、益の道を盡し得るの機會にも臨むものなり。今の人、動もすれば益の道の可なるを知つて、損の道の妙を知らず。一たび益の道を取る能はざるの時に當れば、焦燥懊惱する者多し。これ表裏といふ事を考へず、左右といふ事を思はざるものなり。吐く息を多くせよ、入る息は自ら多からむ。損の道を思ひ得て徹せば、益の道も脚下にあらむなり。

(幸田露伴—洗心録)

二三 櫻 詠

主人「これはこのあたりの者でござる。この頃はいつ方も花の盛りぢやと申すほどに、花見に参りたう存ずれども、暇がなさに、参ることも得いたさぬ。最早、暇になつてござる程に、今日は花見に参らうと存ずる。先づ太郎冠者を呼出し、申しつけう。やいやい、太郎冠者あるか。」

シテ太郎冠者「はあ。アト居たか。シテお前に居ります。」

アト「汝を呼出すこと、別のことではない。この頃は方方の花盛りぢやといへども、暇がなさに、花見に行くこともならなんだ。最早、暇になつたほどに、花見に出でうと思ふが何とあらうぞ。」

シテ「これは珍しいことを仰せられます。この頃は櫻の盛りぢやと申す程に、櫻を御覽せられるとあれば尤もでござるが、珍しからぬ「はな」を御覽せられて、何にさせらるる。」

アト「いや、おのれは何事をいふ。櫻も花も同じことぢや。」

シテ「これは頼うだ人とも覚えぬことを仰せらるる。左様に仰せられ  
たらば、人中で恥をかかせられる、身どもは苦しうござらぬが。」

アド「して、汝がその様にいふには仔細があるか。」

シテ「なかなか仔細こそござれ、はなが見させられたくば、私が「はな」を  
見させられい。他所へござるまでもござらぬ。」

アド「いや、おのれは言語道斷のことをいひ居る。おのれが面な鼻と  
いふ。花といふは別ぢや。」

シテ「さうではござらぬ。歌などにも櫻とは詠まれたれども、はなとは  
詠まれませぬ。」

アド「なかなかでもないことをいひ居る。その歌を詠うで聞かせい。」

シテ「詠うで聞かせたならば、肝を潰させられう。」

アド「急いで詠め。」

シテ「心得ました。櫻散る木の下蔭は寒からで、空に知られぬ雪ぞ降り  
ける。これは何と。」

拾遺集、紀貫之  
の歌。

アド「此方にも花といふ歌がある。」

シテ「さらば詠うで聞かせられい。」

アド「行きくれて木の下蔭を宿とせば、花や今宵のあるじならまし。」

シテ「この方にもまだござる。櫻さく遠山どりのしだり尾の、ながなが  
し日もあかぬ色かな。」

アド「それなら此方にもある。」

吉野山去年のしをりの道かへて、まだ見  
ぬ方の花を尋ねむ。」

シテ「それならば此方には謠にござる。」

アド「謠へ、聽かう。」

シテ「櫻かざしの袖ふれて。」

アド「一段の謠謠ふ。致し様がござる。やい太郎冠者。」

花見車暮るる  
より、月の花よ待たうよ、月の花よ待たうよ。」

シテ「はあ。これでつまりました。」

アド「總別何も知り居らいで、むざとしたことをいひ居つて、某と競合

今はさながら花  
も雪も、皆白雲  
の上人、櫻かざ  
しの袖ふれて、  
花見車暮るるよ  
り、月の花よ待  
たうよ。(謠曲  
小唄)

平忠度の歌。  
新古今集、後鳥  
羽院御製。

同上、西行の歌。

ひ居る。彼方へうせい。

シテ「はあ。アド「えい。シテ「はあ。〔狂言記に據る〕

二四 如意輪堂

攝津國東成郡。  
正平二年(1191)。

安部野の合戦は、霜月二十六日のことなれば、渡邊の橋より堰落されて、流るる兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、川よりひき上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷、膚に結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱ぎかへさせて身を暖め、藥を與へて疵を療ぜしむ。かくの如く四五日皆いたはりて、馬に騎る者には馬を引き、物の具失へる人には物の具を著せて、色代して

河内國北河内郡。

八月の藤井寺合戦、十一月の住吉安部野の合戦。

足利尊氏。

同直義。

ぞ送りける。されば敵ながらその情を感じずる人は、今日より後、心を通ぜむことを思ひ、その恩を報ぜむとする人は、やがて彼の手に屬して、後、四條繩手の合戦に討死をぞしける。さても今年、兩度の合戦に、京勢むげにうち負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はる、遠國また蜂起しぬと告げければ、將軍、左兵衛督の周章、ただ熱湯にて手を洗ふが如し。今は未末の源氏、國國の催勢などを向けては敵ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國中、國・東山・東海二十餘國の勢をぞ向けられける。京勢雲霞の如く淀・八幡に著きぬと聞えければ、楠木帶刀正行・舍弟正時、一族うち連れて、十二月二十七日吉野の皇居



内仕つて候。と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色にあらはれければ、傳奏いまだ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞうるほしける。

主上、乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、龍顔ことに麗しく諸卒を照臨あつて、正行を近く召し、以前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍を屈せしめき。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功かへすがへすも神妙なり。大敵、今勢を盡して向ふなれば、今度の合戦天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戦手を下すべきにはあらずといへども、進むべきを知つて進むは時を失はざらむが爲なり。退くべきを見て退くは後を全うせむ

が爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。と仰せ出されければ、正行頭を地につけて、とかくの敕答に及ばず、ただこれを最後の參内なりと思ひ定めて退出す。

正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衛・同紀六左衛門・子息二人・野田四郎子息二人・楠木將監・西河子息・關地良圓以下、今度の軍に一足も引かず、一所にて討死せむと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參つて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書列ねて、その奥に、

かへらじとかねて思へば、梓弓、

なき數にいる名をぞとどむる。



と、一首の歌を書きとどめ、逆修の爲とおぼしくて、各鬢髪を切つて佛殿に投入れ、その日吉野をうち出でて、敵陣へとぞ向ひける。(太平記)

### 二五 日蓮上人

世に英雄・豪傑とだにいへば、軍人・政事家などに限る如く思ふものあれど、こは甚だ誤れり。軍人・政事家の事業は表面は如何にも派手なれども、唯力づくにて敵を亡ぼし、國を取り、或は時運に乗じて政權を掌握するに過ぎず。謂はば開口のみ廣くして、奥行の淺き生活なり。さればその事業はその當時こそは天下の耳目を驚かせども、後世に傳はりて永く

人類を支配すること能はず。この點に於て、宗教家の仕事は世に並びなく大いなるものなり。釋迦・基督・孔子等はその當時にては眇たる一箇人に過ぎざりしが、その勢力は數千年後の今日に隆隆として盛なるにあらずや。印度・羅馬は既に亡び、支那歴代の變遷數ふるに違なき程なれども、佛教・基督教・儒教は依然として人心を支配せり。

\*  
日蓮上人は日本宗教家の中にて第一等の人物なり。嘗に宗教家として第一等の人物なるのみならず、單に一箇人として見ても、その人物の偉大なること、古今殆どその比を見ずと謂ふも溢美にあらざるべし。安房の漁師の家に生れながら、少なき時より宗教改革の大願を起し、京都・奈良及び關

\*  
(二八二一九四)

東の諸國に歴遊して、佛法はいふに及ばず、神道・儒學一として通ぜざることなく、殆ど天下の知識を學び得たる後、茲に法華經を以て佛教の極致と證悟し、當時流行せる諸宗派を攻撃して、法華宗の一派を開けり。素より天下に一人の身方もなく、四面悉く法敵なる中に、この新宗派を宣傳して、大膽にも、眞言亡國、律國賊、念佛無間、禪天魔と喝破せり。しかもこの新宗派を唱へたるは、念佛者・禪宗信者等の充滿せる鎌倉の眞中にてありしかば、執權北條氏を始として、諸宗の僧侶はいふまでもなく、鎌倉中の信徒皆擧りてこれを迫害せり。日蓮いささか臆し恐ることなく、法華經の爲に命を捨つるは、砂に黄金を代ふるが如しとて、益、その教を弘めたり。

\*相模國川口村字片瀬。今の龍口寺のある所。

彼はこの爲に住所を逐はるること二十餘度、或は暴民に夜襲せられて庵室を焼かれ、或は法敵に要撃せられて眉間を割かれ、或は弟子を殺され、或は檀越の所領を召上げられ、或は伊豆のはてに流され、佐渡の島に追ひやられ、或は龍口\*にて首斬られむとし、打撲、刀創身に絶ゆることなし。かくの如き迫害に遇ふこと前後實に二十年、されど風大なれば波亦いよいよ大なるが如く、少しもその當初の志を枉げず、身命を塵芥の如く輕んじ、偏に法華經の眞理を弘通して、天下を救はむとせり。その事蹟を思ひやれば、心も言葉もなかなかに及ばず、實に人間業ならず見ゆ。法華の宗旨如何は措かむ。その宗祖たる日蓮の人物は實に萬世の龜鑑たり。

二二六 戦争の結果

戦争の結果は正義の確定である。蓋し總ての國民は、實に戦争に依りて、最も明確にその文明史上の階段を定め、世界に於ける地位を決するものである。雄健にして勤勉、高貴にして優秀なる國民は、此の階段の上に高き地歩を占め、従つて大なる活動の範圍と、大なる支配權とを得る。之に反して、懶惰、劣等なる國民は、それに相當する報を受けざるを得ない。かくして戦争は、總ての國民の、其の時代時代に於ける優劣を定める、最も鋭敏なる標準である。總ての國民に、其の優

越の度に従つて、適當なる階段と地位とを與へる、正義の秤である。眠れるを醒し、腐れるを切捨てる神の劍である。人類無限の文明史的向上の健闘に堪へぬ、一切の腐敗、廢頽、衰亡の國民を、枯葉の如くに振ひ落す秋風である。

戦争が正義の秤であり、神の劍であるといふことは、無論、腕力・獸力・暴力が眞に正義であり、神であると云ふ事ではない。蓋し戦争は決して單に腕力沙汰ではない。腕力強き者のみが戦争に勝つが如く思ふのは、戦争の真相を知らぬものである。腕力と云ふ點に於ては、矮小なる我等日本人は、長大なる歐米人・支那人に決して勝るもので無い。若し腕力のみが勝敗を決定するものならば、我等は永遠に戰敗者の運命

より脱することは出来ないかも知れない。

戦争成立の條件、即ち戦争をして始めて可能ならしめるものは、實に義勇奉公の心である。此の道義的・英雄的精神なくしては、戦争に勝つことは愚か、戦争そのものが既に不可能である。私欲・私情を超越して、偏に上に仕ふるの心に燃えずして、大戦争に勝利の光榮を得る事は全然不可能である。されば勝敗を決定する最も重大なる要素は、實に道義的精神である。

而してその第二の要素は智力である。或は近世一切の進歩せる科學を應用して、金城湯池と固めたる要塞を攻め、或は百萬の大兵を蜿蜒數百里に亙りて動かすに當つては、殆

ど吾人の想像も及ばぬ、優越・透徹・緻密・精細なる智力に依らなければならぬ。而してかかる智力の必要なるは、獨り軍に將たる者のみに限らない。一艦を動かし、一飛行機を操縦し、一隊を指揮し、一砲を操るにも、智力はその缺く可からざる要件である。

これに加ふるに、軍事資金即ち金力が戦争の根本的條件たる事は、今更言ふまでもない。ナポレオン嘗て人に戦勝の秘訣を問はれ、「一も金、二も金、三も金」と答へたと云ふ事である。然るに、金力即ち一國の富力は、畢竟國民平時の勤勉・努力とその智力との結果に外ならぬ。

かくして戦場は、實に人間一切の力の發揮せられる所で

ある、一國國民が其の全力を集中する焦點である。かくして戦争の結果は、最も詐なく飾なき、國民の實力の評價である。若し人類の間に戦争がなかつたならば、既に向上・猛進の意氣を失つて、爛熟・頽廢せる國民が、その一度占め得たる地步の上に立つて、先進國といふ美名、いな虚名の下に、居常徒に倨傲尊大、永く天下の權を私するであらう。而してかくの如く爛熟・頽廢せる國民の支配の下に、一切人類も亦遂にその向上・猛進の意氣を消磨し去らざるを得ないであらう。されば戦争は、獨り神の正義の劍であるばかりでない、また實に向上の鞭である。懶惰豚の如き人類を驅つて、崢嶸の阪路を踏みのぼらしめる筈策である。

人類は實に戦争に依りてその總ての能力を發揮し、その精神を砥礪し、その自然性に鍛鍊陶冶の工を加へて來た。人類のうち最も麗しく、最も貴く、最も善きものは、總て戦の中より生れ出たものである。日本的・精神の中、最も貴く麗しきものは、佛敎でもなければ、無論また儒敎でもない、實にその武士的精神である。しかして此の高貴なる武士的精神は、その名のこれを示すが如く、實に戰場に生れたものであつて、決して坊主や腐儒の云ふが如く、印度や支那の敎の生んだものではない。佛敎・儒敎の武士的精神に及ぼせる感化は、何處までも感化に過ぎない。精神そのものはこれら印度・支那の敎より獨立し、日本固有の精神を根柢として、劍戟の間

(一) Persia.

より生じたものである。武士的精神、これ實に我等が國民的精神の最も麗しい劍戟の火花であり、その最も強い矢叫の反響である。

純潔・崇高にして、後人の摹倣を許さぬ彼の燦然たる希臘文明は、實に戦の子であつた。箇人としては希臘人はオリムピアにその力を競ひ、その詩才を競うた。而して國內の都市は互に鎬を削つて、絶えずその優越を争うた。此の如く戦の中に鍛鍊・陶冶せる力を以てこそ、西曆紀元前四百餘年の昔に於て、小さき希臘國民は波斯百萬の兵に對する事が出来たのである。希臘の文學藝術にして、何れか戦争の中から生れなかつた者があらうぞ。而して希臘精神最高の産物であ

(二) Socrates. (三) Plato.

つた哲學、亦實にその例に漏れぬ。かの偉大なる哲學者ソクラテースの逸話として傳へらるるもの、その多くは戰場に於ける逸話である。彼は戦の間にその哲學的精神を練つたのであつた。而して世界第一の哲人プラトンは、哲學的修養を以て武士的鍛鍊の基礎としてゐる。鷹の如く鋭き眼、鐵の如き堅き意志、疾風・迅雷の如く神速にして、しかも正確誤たざる判断、而して巖石をも碎かむ斷行の勇氣は、これ實に戦争に依つてのみ得べき修養である。(鹿子木員信)

修訂新撰國語讀本卷六終

大正三年十二月四日 改訂再版印刷  
 大正六年十月二十三日 修訂印刷  
 大正七年一月十日 修訂再版印刷  
 大正七年一月十四日 修訂再版發行

定價	卷一、二 各金參拾六錢	大正七年一月十日	卷一、二 各金四拾壹錢
卷三、四 各金參拾壹錢	大正七年一月十日	卷三、四 各金參拾六錢	
卷五より各金貳拾九錢	大正七年一月十日	卷五より各金參拾參錢	
卷十まで	大正七年一月十日	卷十まで	

齋藤製本



著者 佐々政一

東京市小石川區大塚窪町八番地

發行者 株式會社 明治書院

東京市神田區錦町一丁目十番地

取締役社長 三樹一平

印刷者 島連太郎

發行所

東京市神田區錦町一丁目  
振替口座東京四九九一番

株式會社 明治書院

電話本局二三九八番

